

与謝野晶子訳

源氏物語 若菜 下卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

若菜（下）

紫式部

與謝野晶子訳

二ごろたれ先<sup>ま</sup>づもちてさびしくも悲

しき世をば作り初<sup>そ</sup>めけん （晶子）

小侍従が書いて来たことは道理に違いないがまた露骨なひどい  
言葉だとも衛門督<sup>えもんのかみ</sup>には思われた。しかももう浅薄な女房などの口

先だけの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人を中へ置かずに一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めないであろうかと苦しんでいた。限らない尊敬の念を持っている六条院に穢辱おじよくを加えるに等しい欲望をこうして衛門督が抱くいだようになった。

三月やよいの終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へ参った。氣不精になっている衛門督はこのことを皆といっしよにするのもおつくうなのであったが、恋しい方のおいでになる所の花でも見れば気の慰みになるかもしれぬと思って出て行った。賭弓かけゆみの競技が御所で二月にありそうでなかった上に、三月は帝みかどの母后の

御忌月ぎよきづきでだめであるのを残念がつている人たちは、六条院で弓の遊びが催されることを聞き伝えて例のように集まって来た。左右の大將は院の御養女の婿であり、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのために左右の近衛府このえふの中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合わせもあつた。殿上役人でも弓の芸のできる者は皆左右に分かれて勝ちを争いながら夕べに至つた。春が終わる日の霞かすみの下にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立てて、大將たちをはじめ、すでに酔っている高官たちが、

「奥のかたがたからお出しになった懸賞品が皆平凡な品でないのを、技術の専門家にだけ取らせてしまうのはよろしくない。少し純真な下手者へたものも競争にはいりましょう」

などと言って庭へ下りた。この時にも衛門督えもんのかみがめいっただふうでじっとしているのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大将の目について、困ったことである。不祥事が起こってくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思いのできた気がした。この二人は非常に仲がよいのである。大将のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあって睦まじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶はんもん

にとらえられているのを、今一人が見てはかわいそうで堪えられ  
がたくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似た  
ものを感じて、恥ずかしくなり、誤った考えにとらわれているこ  
とはわが心ながら許すべきことでない、少しのことにも人を不快  
にさせ、人から批難を受けることはすまいと決心している自分で  
はないか、ましてこれほどおそれおおいことではないではないかと  
心を鞭<sup>むち</sup>うっている人が、また慰められなくなつて、せめてあの時  
に見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手に  
はないが、寂しい自分はせめてその猫を馴<sup>な</sup>つけてそばに置きたい  
とこんな気持ちになつた衛門督は、氣違いじみた熱を持って、ど

うかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあった。

衛門督は妹の女御にょごの所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女きじよらしい慎しみ深さを多く備えた女御は、話し合っている時にも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかった。同胞きょうだいですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけない顔を外にいる者へ宮のお見せになったことは不思議なことであると、衛門督えもんのかみもさすがに第三者になつて考えれば肯定できないこととは思われるのであるが、熱愛を持つ人に対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮へ伺候し



て、むろん御兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違いないと思って、お顔を熱心にお見上げするのであったが、東宮ははなやかな愛嬌あいきょうなどはお持ちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶えんなお顔をしておいでのになった。帝のお飼になる猫の幾疋ひきかの同胞きょうだいがあちらこちらに分かれて行っている一つが東宮の御猫にもなっていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見することができました」

こんなことを申し上げた。東宮は猫が非常にお好きであらせられるために、くわしくお尋ねになった。

「支那しなの猫でございまして、こちらの産のものとは変わっております。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質の優しい人馴なれた猫と申すものはよろしいものでございます」  
こんなふうに宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであった。

あとで東宮は淑景舎しげいしやの方かたの手から所望をおさせになったために、女三によさんの宮みやから唐猫からねこが献上された。噂うわさされたとおりに美しい猫であると言つて、東宮の御殿の人々はかわいがっているのであつ

たが、衛門督は東宮は確かに興味をお持ちになってお取り寄せになりそうであると観察していたことであつたから、猫のを知りたく思つて幾日かのちにまた参つた。まだ子供であつた時から朱雀院すざくが特別にお愛しになつてお手もとお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」

と言いながらその猫を見つけた。非常に愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「實際容貌きりようのよい猫だね。けれど私には馴なつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だったたいしてこれには劣っていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれません」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のがおそばに幾つもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであ

るという気もしているのである。

結局衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫<sup>あいぶ</sup>するのに時を費やす衛門督であつた。人馴<sup>な</sup>つきの悪い猫も衛門督にはよく馴れて、どうかすると着物の裾<sup>すそ</sup>へまつわりに来たり、身体<sup>からだ</sup>をこの人に寄せて眠りに来たりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思いをしながら顔をながめ入っている横で、に・よ・うに・よ・うとかわいい声で鳴くのを撫<sup>な</sup>でながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば汝なれよ何とて鳴く音ねなるらん

これも前生の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言うと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懐中ふところに入れて衛門督は物思いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかに猫を御寵愛ちようあいされるではありませんせんか。ああしたものには無関心だった方がね」

と不審がつてささやくのであった。東宮からお取りもどしの仰せがあつて、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘たまかざらの尚侍ないしのかみは真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才気のあるはなやかな性質の人で、源大将の訪問を受ける時にも睦むつまじいふうに取り扱って、昔のとおりに親しく語ってくれるため、大将も淑景しげい舎しゃの方が羞恥しゆうちを少なくして打ち解けようとする気持ちのないようなのに比べて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大将はそれだけを物足らず思い、真まき木柱ばしらの姫君を引き取って手もとへ置きたがつているのであるが、

祖父の式部卿しきぶきやうの宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人から譏そしられない結婚を自分がさせてやりたい」

と言っておいでになる。帝みかどは御伯父おじのこの宮に深い御愛情をお持ちになって、宮から奏上されることにお背そむきになることはおできにならないふうであつた。もとからはなやかな御生活をしておいでになって、六条院、太政大臣家に続いての権勢の見える所で、世間の信望も得ておいでになった。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であつたから、式部卿の宮の御孫女むすめ、左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろ



いろな人の手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだれを婿にと選定されるふうもなかった。かれにその気があればと宮が心でお思いになる衛門督は猫ほどにも心を惹かぬのかまったくの知らず顔であつた。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮らしを続けて、若い貴女のために朗らかな雰囲気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがって、人づてに聞く継母の生活ぶりにあこがれを持っていた。こうした明るい娘なのである。

兵部卿の宮は今も御独身で、熱心にお望みになつた相手は皆ほかへ取られておしまいになる結果になって、世間体も恥ずかしく

お思いになるのであったが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。大事に思う娘は宮仕えに出すことを第一として、続いては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのを頼もしいことのように思って親たちが娘の幸福のためにそれを願うのは卑しい態度だ」

とお言いになって、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに御同意になった。兵部卿の宮はこの無造作な決まり方を物足らぬようにもお思いになったが、軽蔑けいべつしがたい相手であったから、ずるずる延ばしで話の解消をお待ちになることもおできにならない

で、通って行くようにおなりになった。式部卿の宮はこの婿の宮を大事にあそばすのであった。宮は幾人もの女王によおうをお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞をされることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになつたのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志には従わない子だと言つてそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになつて、新夫婦の居間の裝飾まで御自身で手下してなされたり、またお指図さしずをされたりもするのであった。兵

部卿の宮はお亡<sup>な</sup>くしになった先夫人をばかり恋しがっておいでになつて、その人に似た新婦を得たいと願つておいでになつたために、この姫君を、悪くはないが似た所がないと御覧になつたせいか、通つておいでになるのにおつくうなふうをお見せになつた。

式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分の常態になつてゐる時にはこの娘の思うようでない結婚を歎<sup>なげ</sup>いて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になつたではないか、多情者の宮様であるからと思つて、初めから自分が賛成しなかつた婿であつたから困つたことであると歎いていた。玉鬘<sup>たまかづら</sup>夫人は宮の

お情けの薄さを継娘の不幸として聞いていながら、自分がもし結婚をしてそうした目にあっていたなら、六条院の人々へも、実父の家族へも不名誉なことになるのであったと思った。そして左大將の妻になった運命を悲しむ気もなくなり、継娘に限りなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人おっとにしようとは少しも思わなかった。ただあれだけの情熱を運んでくだすった方が、左大將と平凡な夫婦になってしまったことを輕蔑けいべつしておいでにならないかとそれ以来恥ずかしく思っていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになって、自分のことをどう聞いておいでになるであろうと思うと晴れがましいような気も

するのであつた。この夫人からも新婚した姫君の衣裳いしやうその他の世

話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬ

ふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍ないしのかみに前夫人は

友情をすら覚えているのであるが、式部卿の宮家には大夫人とい

う性質の曲がつた人が一人いて、この人は常にだれのこととも憎ん

で、罵言ばげんをやめないのである。

「親王がたというものは一人だけの奥さんを大事になさるという

ことで、派手はでな生活のできない補いにもなろうというものだの

に」

と陰口かげぐちをするのが兵部卿の宮のお耳にはいった時、不愉快なこ

とを聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戯はやめなかつた自分も、こうまではひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思いになつて、いつそう亡<sup>な</sup>き夫人を恋しく思<sup>おほしめ</sup>召すことばかりがつのつて、自邸で寂しく物思いをしておいでになる日が多かつた。そうはいうものの二年もその状態で続いて来た今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦として済んで行つた。

歳<sup>とし</sup>月<sup>つき</sup>が重なり、帝<sup>みかど</sup>が即位をあそばされてから十八年になつた。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になつて自分の愛する人たちと始終出逢うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであつたが、重く御病氣をあそばされた時ににわかには譲位を行なわせられた。世人は盛りの御代みよをお捨てあそばされることを残念がつて歎なげいたが、東宮ももう大人おとなになつておいでになつたから、お変わりになつても特別變わつたこともなかつた。ゆるぎない大御代おおみよと見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかつた。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王さえ御位みくらいをお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠けいかんするのに惜しい気持ちなどは少しもない」

と言つていたに違いない。左大將が右大臣になつて関白の仕事



もした。御母君の女御にょごは新帝の御代を待たずに亡なくなっていたから、后きさきの位にお上のぼされになっても、それはもう物の背面のことに  
なつて寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が  
東宮におなりになつた。そうなるはずのことはだれも知っていた  
が、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされ  
るのであつた。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移  
り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になつた冷泉院れいぜいに御  
後嗣こうしのないのを御心の中では遺憾おほしめに思召された。実は新東宮だつ  
て六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御煩悶はんもんもなく  
て過ぎされたほど、例の密通の秘密は隠しおおされたが、そのか

わりにこの御系統が末まで続かぬように運命づけられておしまいになったのを六条院は寂しくお思いになったが、御口外あそばすことでもないのだからただお心で味けなくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになって帝の御寵<sup>みかど</sup>はますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后にお立ちになることになつて、今度で三代にもなつていたから何かと飽き足らぬらしい世論があるのをお知りになつた時、冷泉院の中宮<sup>ちゅうぐう</sup>は以前もこうした場合に六条院の強い御支持があつて、自分の後の位は定<sup>きま</sup>つたのであると過去を回想あそばしています。ます院の恩をお感じになつた。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなしに御幸<sup>みゆき</sup>などもおできになることになって、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであった。帝は六条院においでのなる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになったし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受けておいでのなるのではなかった。年月のたつにしたがつて女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的な穏やかな空気に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居<sup>すまい</sup>から退きまして、静かな信

仰生活がしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまったような年齢としにもなっているのですもの、もう尼になることを許してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話しするのであるが、

「もってのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか。それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいる時と違った世間の態度を悲しく感じたりすることになってはという気があるために現状のままだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょう、あなたはそのあとのことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜<sup>けんそん</sup>さを失わないでいることは、かえって将来のために頼もしく思われた。尼君もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になっていた。

住吉<sup>すみよし</sup>の神への願果<sup>さんけい</sup>たしを思い立って参詣<sup>さんけい</sup>する女御は、以前に入道から送って来てあった箱をあけて、神へ約した条件を調べてみたが、それにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあった。年々の春秋の神楽<sup>かぐら</sup>とともに必ず長久隆運の祈りをする事など

は、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであつた。ただ走り書きにした文章にも入道の學問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨て人の心にこんな望みの樓閣が建てられたのであらうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏に済まぬ氣もされた。並みの人ではなくてしばらく自分の祖父になつてこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかったかなどと思われ、女御に明石<sup>あかし</sup>の入道を畏敬<sup>いけい</sup>する心が起つた。今度はまだ女御の行なうことにはせず、六条院の参詣におつれになる形式で京を立つたのであつた。

須磨明石時代に神へお約しになったことは次々に果たされたのであるが、その以後もまた長く幸運が続き、一門子孫の繁栄を御覧になることによつても神の冥助めいじょは忘れずに六条院は紫の女王にょおうも伴つて御参詣あそばされるのであつて、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになつたのであるが、この御身分であつてはある所までは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に大きなことにもなつた。公卿こうけいも二人の大臣以外は全部供奉ぐぶした。神前の舞い人は各衛府えふの次將たちの容貌ようぼうのよいのを、さらに背丈せたいをそろえてとられたのであつた。落選たつせんして歎なげく風流公子もあつた。奏樂者も石清水いwashimizuや賀茂かもの臨

時祭に使われる専門家がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府このえふの中で音楽の上手じょうずとして有名になつてゐる人であつた。また神樂のほうを受け持つ人も多数に行つた。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉ぐぶの中にいるのも無数にあつた。華奢かしやを尽くした高官たちの馬、鞍くら、馬添くらい侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御車みくるまには紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目だたぬふうに乗つてゐた。それには古い知り合いの女御の乳母めのとが陪乗したのである。女房たちの車は夫人付きの者のが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台



で、それぞれに違った派手な味のある飾りと服装が人目に立った。明石の尼君がいつしよに來たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足がで  
きるほどにして」

と院がお言い出しになったのであつて、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になつての御参詣なんですから、あなた  
などが混じつておいでになつては私の立場も苦しくなりますから  
ね、女御さんがもう一段御出世をなすつたあとで、その時に私た  
ちだけでお参りをいたしましょう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長

命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて来たのである。運命の寵児ちようじであることがしかるべきことと思われ  
る女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあ  
ざやかに見えたこともなかった。

十月の二十日はつかのことであつたから、中の忌垣いがきに這はう葛くずの葉も色  
づく時で、松原の下もみじの雑木の紅葉が美しくて波の音だけ秋である  
ともいわれない浜のながめであつた。本格的な支那しな樂高麗樂こつらより  
も東遊あづまびの音楽のほうがこんな時にはぴつたりと、人の心にも波  
の音にも合っているようであつた。高い梢しほで鳴る松風の下で吹く  
笛の音もほかの場所で聞く音とは変わつて身にしみ、松風が琴に

合わせる拍子は鼓を打つてするよりも柔らかでそして寂しくおも  
しろかった。伶人<sup>れいじん</sup>の着けた小忌衣竹<sup>おみごろも</sup>の模様と松の緑が混じり、挿<sup>かざ</sup>  
頭の造花<sup>し</sup>は秋の草花といっしよになったように見えるが、「求<sup>もと</sup>の  
子<sup>めこ</sup>」の曲が終わりに近づいた時に、若い高官たちが正装の袍<sup>ほう</sup>の肩  
を脱いで舞の場へ加わった。黒の上着の下から臙脂<sup>えんじ</sup>、紅紫の下襲<sup>したかさね</sup>  
の袖<sup>そで</sup>をにわかに出し、それからまた下の裯<sup>あこめ</sup>の赤い袂<sup>たもと</sup>の見えるそれ  
らの人の姿を通り雨が少しぬらした時には、松原であることも忘  
れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手<sup>はで</sup>な姿  
に白くほおけた荻<sup>おぎ</sup>の穂を挿<sup>さ</sup>してほんの舞の一節<sup>ひとふし</sup>だけを見せては  
いったのがきわめておもしろかった。

院は昔を追憶しておいでのになった。途中で不幸な日のあつたことも目の前のことのように思われて、それについては語る人もお持ちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召おほしめされた。車へお帰りになつた院は第二の車へ、

たれかまた心を知りて住吉すみよしの神代を経たる松にこと問ふ

という歌を懐中紙ふところがみに書いたのを持たせておやりになった。尼君は心を打たれたように萎しおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつけても、明石を源氏のお立ちになつたころの歎なげかわし

かったこと、女御が幼児であつたころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれていることを知った。そしてまた山へはいつた良人おととも恋しく思われて涙のこぼれる気持ちをおさえて、

住すみの江を生けるかひある渚なぎさとは年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

昔こそ先まづ忘れね住吉の神のしるしを見るにつけても

とまた独言<sup>ひとりごと</sup>もしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。二十日<sup>はつか</sup>の月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには馴<sup>な</sup>れていても、あまり外の見物に出ることを好まなかった紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であったし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は神の懸<sup>か</sup>けたる木綿<sup>ゆふ</sup>かづらかも

紫夫人の作である。小野篁おののたかむらの「比良ひらの山さへ」と歌った雪の朝  
を思つて見ると、奉った祭りを神が嘉納かのうされた証あかしの霜とも思われ  
て頼もしいのであつた。

女御にょご、

神人かんびとの手に取り持たる榊葉さかきばに木綿ゆふかけ添ふる深き夜の霜

中務なかつかさの君、

祝子はふりこが木綿ゆふうち紛まひ置く霜は実げにいちじるき神のしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠よまれたが、書いておく必要がないと思って筆者は省いた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳ちとせから解放されて心の琴線に触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ酒のために神楽かぐらの面ようになった自身の顔も知らずに、もう篝火かがりびも消えかかっている社前で、まだ万歳万歳と櫓さかきを振って祝い合っている。この祝福は必ず院の御一族の上に形となって現われるであろうとますますはなばなしく未来が想像されるのであつ



た。非常におもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞう  
さに明けていったのを見て、若い人たちは渚なぎさの帰る波のようにこ  
こを去らねばならぬことを残念がった。はるばると長い列になっ  
て置かれた車の、垂たれ絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦にしき  
を松原に張ったようであつたが、男の人たちの位階によつて変  
わつた色の正装をして、美しい膳部を院の御車みくるまへ運び続けるのが  
布衣ほいたちには非常にうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅  
香の折敷おしきに鈍色にびの紙を敷いて精進物で、院の御家族並みに運ばれ  
るのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合った。おいでになった時は神前へさ  
さげられる、持ち運びの面倒な物を守る人数も多くて、途中の見  
物も十分におできにならなかったのであったが、帰途は自由なお  
もしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになった  
入道あずかを与らせることのできなかったことを院は物足らず思召され  
たが、それまでは無理なことであろう。実際老入道がこの一行に  
加わっているとしたら見苦しいことでなかったであろうか。その  
人の思い上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だ  
れも心は高く持つべきであると教訓をされたようである。いろい  
ろな話題になって明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを

明石の尼君という言葉もはやった。太政大臣家の近江おうみの君は双六すごろくの勝負さいの賽さいを振る前には、

「明石あかしの尼様、明石の尼様」

と呪文じゅもんを唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどには何の干渉もあそばさない。春秋の行幸みゆきをお迎えになる時にだけ昔の御生活がお心の上に姿を現わすこともあるのであった。女三にょさんの宮みやをなお気がかりに思召おぼしめされて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保護を帝みかどにお託しになった。それで女三の宮は二品にほんの位にお上げられになって、得させられる封戸ふこの数も多くなり、いよい

よはなやかなお身の上になったわけである。紫夫人は一方の夫人の宮がこんなふうになん年間に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院の御愛情だけを力にして今の所は負け目がないとしても、そのお志というものも遂には衰えるであろう、そうした寂しい時にあわない前に今のうちに善処したいとは常に思っていることであつたが、あまりに賢がるふうに思われてはという遠慮をして口へたびたびは出さないのである。院は法皇だけでなく帝までが関心をお持ちになるということがおそれおおく思召されて、冷淡にする噂を立てさすまいというお心から、今ではあちらへおいでになることと、こちらにおられることがちょうど半々

ほどになっていた。道理なこととは思いつながらもかねて思ったとおりの寂しい日の来始めたことに女王は悲しまれたが、表面は冷静に以前のおりにしていた。東宮に次いでお生まれになった女一の宮を紫夫人は手もとへお置きしてお育て申し上げていた。そのお世話の楽しさに院のお留守るすの夜の寂しさも慰められているのであった。御孫の宮はどの方をも皆非常にかわいく夫人は思っているのである。花散里夫人は紫夫人も明石夫人も御孫宮がたのお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将の典侍ないしのすけに生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。美しい子でりこうなこの孫君を院もおかわいがりになった。院は御子の

数が少ないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する御孫たちによって満足をしておいでになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えすることは昔以上で、玉鬘たまかざらももう中年の夫人になり、何かの時には六条院へ訪ねて来て紫夫人にも逢あって話し合うほかにも親しみ深い往来ゆききが始終あつた。姫宮だけは今日もなお少女おとめのようなたよりなさで、また若々しさでおいでになつた。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気づかいがなくおなりになった院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであつた。

朱雀院すざくの法皇はもう御命数も少なくなつたように心細くばかり

思召されるのであるが、この世のことなどはもう顧みないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お逢いあそばされたかった。このまま亡<sup>な</sup>くなって心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず宮が訪<sup>たず</sup>ねておいでになることをお言いやりになった。院も、

「ごもつともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでお伺いをなさらないのに、ましてこうまでお待ちになっておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とお言いになり、機会をどんなふうにして作ろうかと考えておいでになった。何でもなくそつと伺候をするようなことはみすば

らしくてよろしくない。法皇をお喜ばせかたがた外見の整ったことがさせたいとお思になるのである。来年法皇は五十におなりになるのであったから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思いつきになって、それに付帯した法会ほうえの布施ふせにお出しになる法服の仕度したくをおさせになり、すべて精進でされる御宴会の用意であるから普通のことと変わって、苦心の払われることを今からお指図さしずになっていた。昔から音楽がことにお好きな方であったから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでになった。右大臣家の下の二人の子、大将の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も七歳以上の皆殿上勤めをさせておいでに



なった。それらと、兵部卿ひょうぶきやうの宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王がたの子息、御親戚しんせきの子供たちを多く院はお選びになった。殿上人たちの舞い手も容貌ようぼうがよくて芸のすぐれたのを選びととのえて多くの曲の用意ができた。非常な晴れな場合と思ってその人たちは稽古けいこを励むために師匠になる専門家たちは、舞のほうのも楽のほうのも繁忙をきわめていた。女三の宮は琴の稽古を御父の院のお手もとでしておいになったのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになったために、どんなふうにもその芸はなかったかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られた時に宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけは仕

上げたことと思うが」

と言っておいでになることが宮中へも聞こえて、

「そう言われるのは決して平凡なお手並みでない芸に違いない。

一所懸命に法皇の所へ来てお弾ひきになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わって来た。院は、

「今までも何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれているがまだたいした芸になっていないのを、何心なくお伺いされた時に、ぜひ弾けと仰せになった場合に、恥ずかしい結果を生む

ことになってはならない」

とお言いになって、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始めになった。変わったものを二、三曲、また大曲の長いのが四季の氣候によつて変わる音、寒い時と空気の暖かい時によつての弾き方を変えねばならぬことなどの特別な奥義をお教えるになるのであつたが、初めはたよりないふうであつたものの、お心によくはいつてきて上手じょうずにおなりになった。昼は人の出入りの物音の多さに妨げられて、絃いとを揺ゆすつたり、おさえて変わる音の繊細な味を研究おさせになるのに不便なために、夜になってから静かに教うべきであるとお言いになって、女王にょおうの了解をお求めになって院は

ずっと宮の御殿のほうへお泊まりきりになり、朝夕のお稽古けいこの世話をあそばされた。女御にょごにも女王にも琴はお教えにならなかったのであったから、このお稽古の時に珍しい秘曲もお弾きになるのである。予期して、女御も得ることの困難なお暇いとまをようやくしばらく得て帰邸したのであった。もう皇子を二人お持ちしているのであるが、また妊娠して五月ほどになっていたから、神事の多い季節は御遠慮したいと言ってお暇を願って来たのである。

十一月が過ぎるともどるようになると宮中からの御催促が急であるのもさしおいて、このごろの楽ねの音のおもしろさに女御は六条院を去りがたいのであった。なぜ自分には教えていただけなかった

のかと院を恨めしくお思いもしていた。普通と変わって冬の月を最もお好みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになって、女房の中の楽才のあるのに他に楽器で合奏をさせたりして楽しんでおいでになった。

年末などはことに対する女王が忙しくていっさいの心配りこころくばりのほか、女御、宮たちのための春の仕度したくに追われて、

「春ののかな気分になった夕方などにこの琴の音をよくお聞きたい」

などと言っていたが年も変わった。

年の初めにまず帝みかどからののはなやかな御賀を法皇はお受けになる

ことになっていて、差し合ってはよろしくないと院は思召し、少したった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めになり、楽の人、舞い手は始終六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かった。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三絃げんや琵琶びわを一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といっても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものを持っていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じておきたいと思って、少年の時から世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教え

を乞<sup>こ</sup>うたものですが、特に尊敬すべき芸を持った人と思われるのはなかった。その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなって、芸が浅薄になっていると思う。琴などはまして稽古をする者がなくなったということですからあなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がお言いになると、宮は無邪氣に微笑<sup>ほほえ</sup>んで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになった。もう二十一、二でおありになるのであるが、幼稚な所が抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、大人になって

りっぱになったと認めていただけるようにしてお目にかからなければいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであった。実際こうした良人おっとがおいでにならなければ外間のいろいろな噂うわさにさえされる方であつたかもしれぬと女房たちは思っていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風そよかぜが吹き、六条院の庭の梅も盛りになっていった。そのほかの花も木も明日の約されたような力が見えて、杜もりは霞かすみ渡っていた。

「二月になつてからでは賀宴したくの仕度で混雑するであらうし、こちらだけですることもその時の下調べのように思われるのも不快だ



から、今のうちがよい、あちらで会をなさい」

と院はお言いになって女王を寢殿のほうへお誘いになった。供をしたいという希望者は多かったが、寢殿の人と知り合いになっている以外の人は残された。少し年はいっている人たちであるが、りっぱな女房たちだけが夫人に添って行った。童女は顔のいい子が四人ついて行った。朱色の上に桜の色の汗かざみ衫を着せ、下には薄色の厚織の袖あこめ、浮き模様のある表袴おもてばかま、肌はだには槌つちの打ち目のきれいなものをつけさせ、身の姿態とりなしも優美なのが選ばれたわけであつた。女御の座敷のほうも春の新しい装飾がしわたされてあつて、華奢かしやを尽くした女房たちの姿はめざましいものであつた。童女は臙脂えんじ

の色の汗衿かざみに、支那綾しなあやの表袴あこめで、衲やまぶきは山吹色の支那錦にしきのそろいの姿であつた。明石夫人の童女は目だたせないような服装をさせて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下は皆青色を濃淡にした衲で、これも打ち目のでき上がりのよいものを下につけさせてあつた。姫宮のほうでも女御や夫人たちの集まる日であつたから、童女の服装はことによくさせてお置きになつた。青丹あおにの色の服に、柳の色の汗衿かざみで、赤紫の衲あこめなどは普通の好みであつたが、なんとなく気高く感ぜられることは疑いもなかつた。縁側に近い座敷の襖子からかみをはずして、貴女たちの席は几帳きちようを隔てにしてあつた。中央の室には院の御座おんざが作られてある。今日の拍子合

せの笛の役には子供を呼ぼうとお言いになって、右大臣家の三男で玉鬘夫人たまかみづらの生んだ上のほうが笙しょうつの役をして、左大将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあつた。演奏者の茵しとねが皆敷かれて、その席へ院の御秘蔵の楽器が紺錦こんにしきの袋などから出されて配られた。明石夫人は琵琶びわ、紫の女王には和琴わごん、女御は箏そうの十三絃げんである。宮はまだ名楽器などはお扱いにくいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになったのをお配らせになった。院は、

「箏そうの琴ことは絃がゆるむわけではないが、他の楽器と合わせる時に琴柱ことじの場所が動きやすいものなのだから、初めからその心得でい

なければならぬが、女の力では十分締めることがむずかしいであらうから、やはりこれは大将に頼まなければなるまい。それに拍子を受け持っている少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちは恥ずかしく思っていた。明石夫人以外は皆院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできばえを祈っておいになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏も仕馴なれているからだいじよ

うぶ落ち着いた演奏はできるであろうが、和琴というものはむずかしい物でなく、きまったことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春の絃楽は皆しつくり他に合ってゆかねばならぬものであるが、和琴がうまくいっしょになってゆかぬようなことはないかとも損な弾き手に同情もしておいでになった。

左大將は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち合うよりも気のつかわれるふうで、きれいな直衣のうしを薰香たきものの香のよく染しんだ衣服に重ねて、なおも袖そでをたきしめることを忘れずに整った身みな姿りのこの人が現われて来たころはもう日が暮れていた。感じのよ

い早春の黄昏たそがれの空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわわに咲いていた。ゆるやかな風の通り通うごとに御簾みすの中の薰香たきものの香も梅花の匂においを助けるように吹き迷って鶯うぐいすを誘うかと見えた。御簾の下の方から箏そうの琴ことのさきのほうを少しお出しになって、院が、「失礼だがこの絃いとの締めりぐあいをよく見て調音いんをしてほしい。他人に来てもらうことのできない場合だから」

とお言いになると、大將はうやうやしく琴を受け取って、一越いっこつ調の音ねに発はつの絃いとの標準の柱じを置き全体を弾き試みることはせずにそのまま返そうとするのを院は御覧になつて、

「調子をつけるだけの一弾きは氣どらずにすべきだよ」

と院がお言いになった。

「今日の会に私がいささかでも音を混ぜますようなだいそれた自信は持っておりません」

大將は遠慮してこう言う。

「もっともだけれども、女だけの音楽に引きさがった、逃げたと言われるのは不名誉だろう」

院はお笑いになった。で大將は調子をかき合わせて、それだけで御簾みすの中へ入れた。院の御孫にあたる小さい人たちが美しい直のう衣姿しをして吹き合わせる笛の音はまだ幼稚ではあるが、有望な未来の思われる響きであった。かき合わせが済んでいよいよ合奏に

なつたが、どれもおもしろく思われた中に、琵琶はすぐれた名手であることが思われ、神さびた撥<sup>はち</sup>使用で澄み切った音をたてていた。大將は和琴に特別な関心を持っていたが、それはなつかしい、柔らかな、愛嬌<sup>あいぎょう</sup>のある爪音<sup>つまおと</sup>で、逆にかく時の音が珍しくはなやかで、大家のもつたいらしくして弾くのにも少しも劣らない派手<sup>はで</sup>な音は、和琴にもこうした弾き方があるかと大將の心は驚かされた。深く精進を積んだ跡がよく現われたことによって院は安心をあそばされて夫人をうれしくお思いになった。十三絃の琴は他の楽器の音の合い間合い間に繊細な響きをもたらすのが特色であつて、女御の爪音<sup>つまおと</sup>はその中にもきわめて美しく艶<sup>えん</sup>に聞こえた。琴は



他に比べては洗練の足らぬ芸と思われたが、お若い稽古盛りの年けいこごろの方であつたから、確かな弾き方はされて、ほかの楽器と交響する音もよくて、上達されたものであると大将も思った。この人が拍子を取って歌を歌った。院も時々扇を鳴らしてお加えになるお声が昔よりもまたおもしろく思われた。少し無技巧的におなりになったようである。大将も美音の人で、夜のふけてゆくにしたがつて音楽三昧さんまいの境地が作られていった。月がややおそく出るころであつたから、燈籠とうろうが庭のそここにもされた。院が宮の席をおのぞきになると、人よりも小柄なお姿は衣服だけが美しく重なっているように見えた。はなやかなお顔ではなくて、ただ貴

族らしいお美しさが備わり、二月二十日ごろの柳の枝がわずかな  
芽の緑を見せているようで、鶯の羽風にも乱れていくかと思われ  
た。桜の色の細長を着ておいでになるのであるが、髪は右からも  
左からもこぼれかかってそれも柳の糸のようである。これこそ最  
上の女の姿というものであろうと院はおながめになるのであつた  
が、女御には同じような艶な姿に今一段光る美の添って見える所  
があつて、身のとりなしに気品のあるのは、咲きこぼれた藤の花  
が春から夏に続いて咲いているころの、他に並ぶもののない優越  
した朝ぼらけの趣である。と院は御覧になつた。この人は身ごもつ  
ていて、それがもうかなり月に月が重なつて悩ましいころであつた

から、済んだあとでは琴を前へ押しやって苦しそうに脇息へより  
かかっているのであるが、背の高くない身体を少し伸ばすように  
して、普通の大きさの脇息へ寄っているのが気の毒で、低いのを  
作り与えたい気もされて憐まれた。紅梅の上着の上にはらはらと  
髪のかかった灯かげの姿の美しい横に、紫夫人が見えた。これは  
紅紫かと思われる濃い色の小桂に薄臙脂の細長を重ねた裾に余つ  
てゆるやかにたまった髪がみごとで、大きさもいい加減な姿で、  
あたりがこの人の美から放射される光で満ちているような女王  
は、花にたとえて桜といってもまだあたらないほどの容色なので  
ある。こんな人たちの中に混じって明石夫人は当然見劣りするは

ずであるが、そうとも思われぬだけの美容のある人で、聡明らし  
い品のよさが見えた。柳の色の厚織物の細長に下へ萌葱かと思わ  
れる小桂こつちぎを着て、薄物の簡単な裳もをつけて卑下した姿も感じがよ  
くて侮あなずらわしくは少しも見えなかった。青地の高麗錦こまにしきの縁ふちを  
取った敷き物の中央にもすわらずに琵琶びわを抱いて、きれいに持つ  
た撥はちの尖さきを絃いとの上に置いているのは、音を聞く以上に美しい感じ  
の受けられることであって、五月さつきの橘たちばなの花も実もついた折り枝が  
思われた。いずれもつつましくしているらしい内のものの気配けはいに  
大将の心は惹ひかれるばかりであつた。紫の女王の美は昔の野分のわきの  
夕べよりもさらに加わっているに違いないと思うと、ただその一

事だけで胸がとどろきやまない。女三にょさんの宮みやに対しては運命が今少し自分に親切であつたなら、自身のものとしてこの方を見ることのできたのであつたと思うと、自身の臆病おくびょうさも口惜くちおしかった。朱雀すざく院からはたびたびそのお気持ちを示され、それとなく仰せになつたこともあつたのであるがと思いながらも、よく隙すきの見えることを知つては女王に惹かれたほど心は動きもしないのであつた。女王とはだれも想像ができぬほど遠い間隔のある所に置かれてゐる大將は、その忘れがたい感情などは別として、せめて自分の持つ好意だけでも紫の女王に認めてもらうだけを望んでできないのを考えては煩悶はんもんしているのである。あるまじい心などは

いだいていない、その思いを抑制することはできる人である。

夜がふけてゆくらしい冷ややかさが風に感ぜられて臥待月が上

ふしまちづき

り始めた。

「たよりない春の朧月夜だ。秋のよさというのもまたこうした夜

おぼろ

の音楽と虫の音がいつしよに立ち上ってゆく時にあるものだね」

と院は大将に向かってお言いになった。

「秋の明るい月夜には、音楽でも何の響きでも澄み通って聞こえますが、あまりきれいに作り合わせたような空とか、草花の露の色とかは、専念に深く音楽を味わわせなくなる気もいたします。

やはり春のたよりない雲の間から朧な月が出ますほどの夜に、静

かな笛の音などの上ってゆくのを聞きますほうが、音楽そのものを楽しむのにはよいかと思われます。女は春を憐むあわれという言葉がございますがもつともなことと思われます。すべてのものの調子がしっくり合うのは春の夕方に限るようになえられますが」

と大将が言うと、

「それは断定的には言えないことだ。古人でさえ決めかねたことなのだから、末世のわれわれの力で正しい批判のできるわけもない。ただ音楽のほうでは秋の律の曲を、春の呂りよの曲の下に置かれていることだけは今君が言ったような理由があるからだろう」

院はこう仰せられた。また、

「どう思うかね。現在の優秀な音楽家とされている人たちの、宮中などのお催しなどの場合に演奏を命ぜられる人のを聴<sup>き</sup>いても名人だと思われるのは少なくなったようだが、先輩についてよく研究をしようとするような熱心が足りないのかね。今日のような女ばかりの音楽の会に交じっても、格別きわだつと思われる人があ  
るようにも思われない。しかしそれは近年の私がどこへも行かずに一所に引きこもっていて、鑑識が悪く偏してしまったのかもしれないが、とにかく感激を覚えさせられる音楽者のいないのは残念だ。どんな芸事も演ぜられる場所によっては平生と違ったできばえを見せるものであるが、最も晴れの場所の宮中でのこのごろ



の音楽の遊びに選り出される人たちに、この女性たちのを比べて劣っていると思う点があるかね」

「それを申し上げたいと思ったのでございますが、しかし頭の悪い私はでたらめを申すことになるかもしれません。今の世間の者は昔の音楽の盛んな時を知らないからでもありますか衛門督えもんのかみの和琴、兵部卿ひょうぶぎやうの宮様の琵琶びわなどを激賞いたします。私どもも妙技とはしておりますが、今晚の皆様の御演奏には驚愕きやうがくいたしました。はじめはたいしたお遊びでもあるまいと軽く考えていたためにいっそう感激が大きいのでございましょうか。歌の役はまことに気がさして勤めにくうございました。和琴は太政大臣によってだ

けすべての楽音を率いるような巧妙な音のたつものと思っておりまして、その境地へは一步も他の者がはいれないものと思われるむずかしい芸でございますが、今晚のはまた特別なものでございました。結構でした」

大将はほめた。

「そんな最大級な言葉でほめられるほどのものではないのだが」得意な御微笑が院のお顔に現われた。

「私にはまずできそこねの弟子はないようだね。琵琶だけは私に骨を折らせた弟子<sup>でし</sup>の芸ではないがすぐれたものであったはずだ。意外なところで私の発見した天性の弾き手なのだよ。ずいぶん感

心したもののだが、そのころよりはまた進歩したようだ」

こうして皆御自身の功にしてお言いになるのを聞いていて、女房たちなどは肱ひじを互いに突き合わせたりして笑っていた。

「すべての芸というものは習い始めると奥の深さがわかって、自分で満足のできるだけを習得することはとうていできないものなのだが、しかしそれだけの熱を芸に持つ人が今は少ないから、少しでも稽古けいこを積んだことに自身で満足して、それで済ませていくのだが、琴というものだけはちよつと手がつけられないものなのだよ。この芸をきわめれば天地も動かすことができ、鬼神の心も柔らげ、悲境にいた者も楽しみを受け、貧しい人も出世ができ

て、富貴な身の上になり、世の中の尊敬を受けるようなことも例のあることなのだ。この芸の伝わった初めの間は、これを学ぶ人は皆長く外国へ行っていて、あらゆる困難に打ち勝って、上達しようとしたものだが、そうまでして成功したものの数はわずかだったのだ。実際すぐれた琴の音は月や星の座を変えさせることもあったし、その時季でなしに霜や雪を降らせたり、黒雲が湧き出したり、雷鳴がそのためにしたりしたことも昔はあったのだよ。だれも音楽のうちの最高のものと知っていても、完全にその芸を習いおおせるものが少なかったし、末世にはなるし、今残っているのは昔のほんとうのものの断片だけの価値のものかとも思

われる。それでもまだ鬼神が耳をとどめるものになっている琴の稽古<sup>けいこ</sup>をなまじいにして、上達はできずにかえっているいろいろな終わりを見たりする人があるものだから、琴の稽古をする者は不吉を招くというような迷信もできて、近ごろではこの面倒な芸を習う人が少なくなったということだね。遺憾なことだ。琴がなくて世の中の音楽が根本の音を持たないものになるのだからね。すべての物は衰えかけると早い速力で退化する一方なんだから、そんな中で一人の人間だけが熱心にその芸に志して、高麗<sup>こうらい</sup>、支那<sup>しな</sup>と渡り歩いて家族も何も顧みない者になってしまうのも狂的だから、それほどはしないでも、この芸がどんなものであるかを

知りうるだけのことを私はしたいと思って、一曲でも十分に習いうることは困難なものとしても、これにはむずかしい無数の曲目のあるものなのだから、若くて音楽熱の盛んな年ごろの私は世の中にあるだけの琴の譜を調べたり、あちらから来ているものは皆手もとへ取り寄せて、それによって研究をしたが、しまいには私以上の力のある先生というものもなくなって不便だったものの、独学で勉強をしたが、それでも古人の芸に及ぶものでは少しもなかったのだからね。ましてこれからは心細いものになるだろうとこの芸について私は悲しんでいる」

などと院のお語りになるのを聞いていて大将は自身をふがいな

く恥ずかしく思った。

「今上きんじょうの親王が御成人になれば、それまで生きているかどうかおぼつかないことだが、その時に私の習いえただけの琴の芸をお授けしようと思っている。二の宮は今からそうした天分を持たれるようだから」

このお言葉を明石夫人あかしは自身の名誉であるように涙ぐんで側聞かたえぎきをしていたのであった。

女御は箏そうを紫夫人に譲って、悩ましい身を横たえてしまったので、和琴わごんを院がお弾ひきになることになって、第二の合奏は柔らかい気分の派手はでなものになって、催馬楽さいばらの葛城かつらぎが歌われた。院が繰

り返しの所々で声をお添えになるのが非常に全体を美しいものにした。月の高く上る時間になり、梅花の美もあざやかになってきた。十三絃げんそうの箏そうの音は、女御のは可憐かれんで女らしく、母の明石夫人に似た揺ゆの音が深く澄んだ響きをたてたが、女王のはそれとは変わってゆるやかな気分が出て、聴きき手の心に酔いを覚えるほどの愛嬌あいきょうがあり、才のひらめきの添ったものであった。合奏の末段になつて呂りよの調子が律になる所の搔かき合わせがいつせいにはなやかになり、琴は五つの調べの中の五六の絃いとのはじき方をおもしろく宮はお弾きになつて、少しも未熟と思われる点がなく、よく澄んで聞こえた。春と秋その他のあらゆる場合に変化させねばならぬ



弾法の使いこなしようを院がお教えになったのを誤たずによく会得して弾いておいでになるのに、院は誇りをお覚えになった。小さい御孫たちが熱心に笛の役を勤めたのをかわいく院は思召おぼしめして、

「眠くなっただろうのに、今晚の合奏はそう長くしないはずでわずかな予定だったのがつい感興にまかせて長く続けていて、それも楽音で時間を知るほどの敏感がなく、思わずおそくなって、思いやりのないことをした」

とお言いになり、笙しょうの笛を吹いた子に酒杯をお差しになり、御服を脱いでお与えになるのであった。横笛の子には紫夫人のほう

から厚織物の細長に袴はかまなどを添えて、あまり目だたせぬ纏頭てんとうが出された。大将には姫宮の御簾みすの中から酒器かわらけが出されて、宮の御装束一そろいが纏頭にされた。

「変ですね。まず先生に御褒美ほうびをお出しにならないで。私は失望した」

院がこう冗談じょうだんをお言いになると、宮の几帳きちようの下からお贈り物の笛が出た。院は笑いながらお受け取りになるのであったが、それは非常によい高麗笛であつた。少しお吹きになると、もう退出し始めていた人たちの中で大将が立ちどまって、子息の持っていた横笛を取ってよい音に吹き合わせるのが、至芸と思われるこの音

を院はうれしくお聞きになり、これもまた自分の弟子<sup>でし</sup>であつたと満足されたのであつた。

大將は子供をいっしよに車へ乗せて月夜の道を歸つて行つたが、いつまでも第二回のおりの箏の音が耳についていて、遣<sup>や</sup>る瀬なく恋しかった。この人の妻は祖母の宮のお教えを受けていたといつても、まだよく心にはいらぬうちに父の家へ引き取られ、十三絃もはんばな稽古<sup>けいこ</sup>になつてしまつたのであるから、良人<sup>おっと</sup>の前では恥じて少しも弾かないのである。すべておおまかに外見をかまわず暮らしていて、あとへあとへ生まれる子供の世話に追われているのであるから、大將は若い妻の感じのよさなどは少しも受

け取りえない良人なのである。しかも嫉妬しつとはして、腹をたてなどする時に天真爛漫らんまんな所に見える無邪気な夫人なのであった。

院は対のほうへお帰りになり、紫夫人はあとに残って女三の宮とお話などをして、明け方に去ったが、昼近くなるまで寢室を出なかつた。

「宮は上手じょうずになられたようではありませんか。あの琴をどう聞きましたか」

と院は夫人へお話しかけになった。

「初めごろ、あちらでなさいますのを、聞いておりました時は、まだそうおできになるとは伺いませんでしたが、非常に御上達な

さいましたね。ごもつともですわね、先生がそればかりに没頭していらっしやったのですものね」

「そうですね、手を取りながら教えるのだからこんな確かな教授法はなかったわけですね。あなたにも教えるつもりでいたが、あれは面倒で時間のかかる稽古ですからね、つい実行ができなかったのだが、院の陛下も琴だけの稽古はさせているだろうと言っておられるということを知くと、お気の毒で、せめてそれくらいのことには保護者選ばれたものの義務としてしなければならぬかという気になって、やり始めた先生なのですよ」

などと仰せられるついでに、

「小さかったころのあなたを手もとへ置いて、理想的に育て上げたいとは思ったものの、そのころの私にはひまな時間が少なく、特別なものの先生になってあげることもできなかったし、近年はまたいろいろなことが次から次へと私を駆使して、よく世話もしてあげなかった琴のできのよかったことで私は光栄を感じましたよ。大將が非常に感心しているのを見たこともうれしくてありませんでしたよ」

ともおほめになった。そうした芸術的な能力も豊かである上に、今は一方で祖母の義務を御孫の宮たちのために忠実に尽くしていて、家庭の実務をとることに力不足は少しも見せない夫

人であることを院は思いになり、こうまで完全な人というもの  
は短命に終わるようなこともあるのであると、そんな不安をお覚  
えになった。多くの女性を御覧になった院が、これほどにも物の  
整った人は断じてほかにないときめておいでになる紫の女王で  
あった。夫人は今年が三十七であった。同棲あそばされてからの  
長い時間を院は追懐あそばしながら、

「祈祷きとうのようなことを半生の年よりもたくさんさせて今年は無理  
をしないようにあなたは慎むのですね。私がそうしたことは常に  
気をつけてさせなければならぬのだが、ほかのことに紛れて  
うっかりとしている場合もあるだろうから、あなた自身で考え

て、ああしたいというようないくぶん大きな仏事の催しでもあれば、言ってくればいくらかでも用意をさせますよ。北山の僧都そうずがなくなっておしまいになったことは惜しいことだ。親戚しんせきとせずと言ってもりっぱな宗教家でしたがね」

ともお言いになった。また、

「私は生まれた初めからすでにたいそうに扱われる運命を持っていたし、今日になって得ている名誉も物質的のしあわせも珍しいほどの人間ともいってよいが、また一方ではだれよりも多くの悲しみを見て来た人とも言えるのです。母や祖母と早く別れたことに始まって、いろいろな悲しいことが私のまわりにはありました



よ。それが罪業を軽くしたことになるって、こうして思いのほか長生きもできるのだと思いますよ。あなたは私とあの別居時代のがい経験をしてからはもう物思いも煩悶はんもんもなかったろうと思われ  
る。お后きうきと言われる人、ましてそれ以下の宮廷の人には人との競争意識でみずから苦しめない人はないのですよ。親の家にいるままのようにして今日まで来たあなたのような気楽はだれにもないものなのですよ。この点だけではあなたがだれよりも幸福だったということがわかりますか。思いがけなく姫宮をこちらへお迎えしなければならぬことになってからは、少しの不愉快はあるでしょうがね、それによって私の愛はいつそう深まっているのだ

が、あなたは自身のことだからわかっていないかもしれない。しかし物わかりのいい人だから理解してくれるかもしれないと頼みにしていますよ」

と院がお言いになると、

「お言葉のように、ほかから見ますれば私としては過分な身の上になっているのですが、心には悲しみばかりがふえてまいります。それを少なくしていただきたいと神仏にはただそれを私は祈っているのですよ」

言いたいことをおさえてこれだけを言った女王に貴女らしい美しさが見えた。

「ほんとうは私はもう長く生きていられない気がしているのでございますよ。この厄年やくどしまでもまだ知らない顔でこのままです。ことは悪いことと知っています。以前からお願いしていることですから、許していただけましたら尼になります」

とも夫人は言った。

「それはもつてのほかのことですよ。あなたが尼になってしまったあとの私の人生はどんなにつまらないものになるだろう。平凡に暮らしてはいるようなものの、あなたと睦むつまじくして生きていくということよりよいことはない。私は信じているのです。あなただけをどんなに私が愛しているかということ、これからの長

い時間に見ようと思ってください」

院がこうお言いになるのを、またもいつもの慰め言葉で自分の信仰にはいる道をおはばみになると聞いて、夫人の涙ぐんでいるのを院は憐れあわに思いになって、いろいろな話をし出して紛らせようとおつとめになるのであった。

「そうおおぜいではありませんが、私の接触した比較的優秀な女性について言ってみると、女は何よりも性質が善良で落ち着いた考えのある人が一等だと思われるが、それがなかなか望んで見いだせないものなのですよ。大将の母とは少年時代に結婚をして、尊重すべき妻だとは思っていましたが、仲をよくすることができ

ずに、隔てのあるまままで終わったのを、今思うと気の毒で堪えられないし、残念なことをしたと後悔もしていながら、また自分だけが悪いのでもなかったと一方では考えられもするのですよ。

りっぱな貴婦人であったことは間違いないことで、なんらの欠点はなかったが、ただあまりに整然ととのったのが堅い感じを受けさせてね。少し賢過ぎるっていいような人で、話で聞けば頼もしいが、妻にしては面倒な気のするというような女性でしたよ。中宮ちゅうぐうの母君みやすどころの御息所は、高い見識の備わった才女の例には思い出される人だが、恋人としてはきわめて扱いにくい性格でしたよ。怨むうらのが当然だと一通りは思われることでも、その人はそ

のままそのことを忘れずに思いつめて深く恨むのですから、相手は苦しくてならなかった。自己を高く評価させないではおかないという自尊心が年じゅう付きまっわっているような気がして、そんな場合に自分は気に入らない男になるかもしれないと、あまりに見栄を張り過ぎるような私になって、そして自然に遠のいて縁が絶えたのですよ。私が無二無三に進み寄ってあるまじい名の立つ結果を引き起こしたその人の真価を知っているだけなお捨ててしまったのが済まないことに思われて、せめて中宮にはよくお尽くししたいと、それも前生の約束だったのでしようが、こうして子にしてお世話を申していることで、あの世からも私を見直して

いるでしょうよ。今も昔も浮わついた心から人のために気の毒な結果を生むことの多い私ですよ」

なお幾人いくたりかの女の上を院はお語りになった。

「女御にょごのあの後見役はたいしたものではあるまいと軽く見てかかった相手ですが、それが心の底の底までは見られないほどの深い所のある女でしたからね。うわべは素直らしく柔順には見えませんが、自己を守る堅さが何かの場合に見えるれいり伶俐なたちなのです」

と院がお言いになると、

「ほかの方は見ないのですからわかりませんけれど、あの方には

おりおりお目にかかっていますが、聡明そうめいで聡明で御自身の感情を少しもお見せにならないのに比べて、だれにも友情を押しつける私をあの方はどう御覧になっていらっしゃるかときまりが悪くてね。しかしとにもかくにも女御は私をいようにだけ解釈してくださいださるだろうと思っています」

夫人にとってはねたましく思われた人であつた明石夫人あかしをさえこんなに寛大な心で見るとなつたのも、女御を愛する心の深おほしめいからであろうと院はうれしく思召した。

「あなたは恨む心もある人だが思いやりもあるから私をそう困らせませんね。たくさんな女の中であなたの真似まねのできる人はな



い。あまりにりっぱ過ぎるわけですね」

微笑して院はこうお言いになる。

夕方になってから、

「宮がよくお弾ひきになったお祝いを言ってあげよう」

と言って、院は寢殿へお出かけになった。自分があるために苦しんでいる人がほかにあることなどは念頭になくて、お若々しく宮は琴の稽古けいこを夢中になってしておいでになった。

「もう琴は休ませておやりなさい。それに先生をよく歓待なさらなければならないでしょう。苦しい骨折りのかいがあつて安心してよいできでしたよ」

と院はお言いになって、楽器は押しやって寝ておしまいになった。

対のほうでは寢殿泊まりのこうした晩の習慣ならわしで女王によおうは長く起きていて女房たちに小説を読ませて聞いたりしていた。人生を写した小説の中にも多情な男、幾人も恋人を作る人を相手に持って、絶えず煩悶はんもんする女が書かれてあっても、しまいには二人だけの落ち着いた生活が営まれることに皆なっているようであるが、自分はどうだろう、晩年になってまで一人の妻にはなれずにいるではないか、院のお言葉のように自分は運命に恵まれているのかもしれぬが、だれも最も堪えがたいこととする苦痛に一生付きまとわ

れていなければならぬのであろうか、情けないことであるなどと思いつけて、夫人は夜がふけてから寢室へはいったのであるが、夜明け方から病になって、はなはだしく胸が痛んだ。女房が心配して院へ申し上げようと言っているのを、

「そんなことをしては済みませんよ」

と夫人はとめて、非常な苦痛を忍んで朝を待った。発熱までもして夫人の容体は悪いのであるが、院が早くお帰りにならないのをお促しすることもなしにいるうち、女御のほうから夫人へ手紙を持たせて来た使いに、病氣のことを女房が伝えたために、驚いた女御から院へお知らせをしたために、胸を騒がせながら院が

歸つておいでになると、夫人は苦しそうなふうで寝ていた。

「どんな気持ちですか」

とお言いになり、手を夜着の下に入れてごらんになると非常に夫人の身体からだは熱い。昨日話し合われた厄年のことも思われて、院は恐ろしく思召されるのであつた。粥かゆなどを作つて持つて来たが夫人は見ることにすらもいやがつた。院は終日病床にお付き添いになつて看護をしておいでになつた。ちよつとした菓子なども口にせず起き上がらないまま幾日かたつた。どうなることかと院は御心配になつて祈祷きとうを数知らずお始めさせになつた。僧を呼び寄せて加持かじなどもさせておいでになつた。どこが特に悪いともなく夫

人は非常に苦しがるのである。胸の痛みの時々起こるおりなども堪えがたそうな苦しみが見えた。いろいろな養生ようじょうもまじないもするがききめは見えない。重い病氣をしても時さえたてばなおる見込みのあるのは頼もしいが、この病人は心細くばかり見えるのを院は悲しがつておいでになった。もうほかのことをお考えになる余裕がないために、法皇の賀のことも中止の状態になった。法皇の御寺みでらからも夫人の病をねんごろにお見舞いになる御使いがたびたび来た。

夫人の病氣は同じ状態のまままで二月も終わった。院は言い尽くせぬほどの心痛をしておいでになって、試みに場所を変えさせた

らとお考えになつて、二条の院へ病女王をお移しになつた。六条院の人々は皆大厄難やくなんが来たように、悲しんでいる。冷泉院れいぜいも御心痛あそばされた。この夫人にもしものがあれば六条院は必ず出家を遂げられるであろうことは予想されることであつたから、大将なども誠心誠意夫人の病氣回復をはかるために奔走しているのであつた。院が仰せられる祈禱きとうのほかに大将は自身の志での祈禱もさせていた。少し知覚の働く時などに夫人は、

「お願いしていますことをあなたは拒こみになるのですもの」

と、院をお恨みした。力の及ばぬ死別にあうことよりも、生きながら自分から遠く離れて行かせるようなことを見ては、片時も

生きるに堪えない気があそばされる院は、

「昔から私のほうが出家のあこがれを多く持っていたながら、あなたが取り残されて寂しく暮らすことを思うのは、堪えられないことなので、こうしてまだ俗世界に残っているのに、逆にあなたが私を捨てようと思うのですか」

こんなばかりお言いになって御同意をあそばされないのが悪いのか、夫人の病体は頼み少なく衰弱していった。もう臨終かと思われることも多いためにまた尼にさせようかとも院はお惑いになるのであった。こんなことで女三にょさんの宮みやのほうへは仮の訪問すらあそばされなかった。どこでも楽器はしまい込まれて、六条院の

人々は皆二条のほうへ集まっで行った。このお邸やしきは火の消えたようであつた。ただ夫人たちだけが残っているのであるが、これを見れば六条院のはなやかさは紫の女王一人のために現出されていたことのように思われた。女御も二条の院のほうへ来て御父子で看護をされた。

「あなたは普通のお身体からだでないのですから、物怪もののけの徘徊はいかいする私の病室などにはおいでにならないで、早く御所へお帰りなさいね」

と、病苦の中でも夫人は心配して言うのであつた。若宮のおかわいらしいのを見ても夫人は非常に泣くのであつた。

「大きくおなりになるのを拝見できないのが悲しい。お忘れにな



るでしょう」

などと言うのを聞く女御も悲しかった。

「そんな縁起でもないことを思っではいけませんよ。悪いようでもそんなことにはならないだろうと思う自身の性格で運命も支配していくことになりますからね。狭い心を持つ者は出世をしても寛大な気持ちでいられないものだから失敗する。善良な、おおやうな人は自然に長命を得ることになる例もたくさんあるのだから、あなたなどにそんな悲しいことは起こってきませんよ」

などと院はお慰めになるのであった。神仏にも夫人の善良さ、罪の軽さを告げて目に見えぬ加護を祈らせておいでになるのである

る。修法しゅほうをする阿闍梨あじゃりたち、夜居よいの僧などは院の御心痛のはなはだしさを拝見することの心苦しさに一心をこめて皆祈った。少しかい日が間に五、六日あって、また悪いというような容体で、幾月も夫人は病床を離れることができなかったから、やはり助かりがたい命なのかと院はお歎なげきになった。物怪もののけで人に移されて現われるものもない。どこが悪いということもなくて日に添おほしめえて夫人は衰弱していくのであったから、院は悲しくばかり思召おもほしめされて、いっさいほかのことはお思いになれなかった。

あの衛門督えもんのかみは中納言になっていた。衛門督の官も兼ねたままである。当代の天子の御信任を受けてはなやかな勢力のついてくる

につけても、失恋の苦を忘れかねて、女三の宮の姉君の二の宮と結婚をした。これは低い更衣こうい腹の内親王であつたから、心安い氣がして格別の尊敬を妻に払う必要もないと思つて、院からお引き受けをしたのである。普通の人に比べてはすぐれた女性ではおありになつたが初めから心に沁しんだ人に変えるだけの愛情は衛門督に起こらなかつた。ただ人目に不都合でないだけの良人おっとの義務を尽くしているに過ぎないのであつた。今も以前の恋の続きにその方のことを聞き出す道具に使っている女三の宮の小侍従という女は、宮の侍従の乳母めのとの娘なのである。その乳母の姉が衛門督の乳母であつたから、この人は少年のころから宮のお噂うわさを聞いてい

た。お美しいこと、父帝が溺愛<sup>できあい</sup>しておいでになることなどを始終聞かされていたのがこの恋の萌芽<sup>きざし</sup>になったのである。

六条院が病夫人と二条の院へお移りになっいて、ひまであるうことを思つて小侍従を衛門督は自邸へ迎えて、熱心に話すのはまたそのことについてであつた。

「昔から命にもかかわるほどの恋をしていて、しかも都合のよいあなたという手蔓<sup>てづる</sup>を持っいて、宮様の御様子も聞くことができ、私の煩悶<sup>はんもん</sup>していることも相当にお伝えしてもらっているはずなのだが、少しも見るに足る効果がないから残念でならない。あなたに恨めしくなるよ。法皇様さえも、宮様が幾人もの妻の中の

一人におなりになって、第一の愛妻はほかの方であるというわけ  
で、一人お寝<sup>やす</sup>みになる夜が多く、つれづれに暮らしておいでにな  
るのをお聞きになって、御後悔をあそばしたふうで、結婚をさせ  
るのであつたら普通人の忠実な良人<sup>おつと</sup>を宮のために選ぶべきだつた  
とお言いになり、女<sup>にょ</sup>二の宮<sup>みや</sup>はかえって幸福で将来が頼もしく見え  
るではないかと仰せられたということを私は聞いて、お気の毒に  
も、残念にも思つて煩悶しないではいられないではないか。私の  
宮さんも御姉妹<sup>きようだい</sup>ではあるが、それはそれだけの方としておくのだ  
よ」

と衛門督<sup>えもんのかみ</sup>が歎息<sup>たんそく</sup>をしてみせると、小侍従は、

「まあもったいない。それはそれとしてお置きになって、また何をどうしようというのでしょうか」

ととがめた。衛門督は微笑を見せて、

「まあ世の中のこととは皆そうしたもので、表も裏もあるものなのだよ。私が三の宮さんの熱心な求婚者であったことは、法皇様も陛下もよく御承知で、陛下はその時代に十分見込みはありそうだよ、とも仰せられたものなのだが、もう少しの御好意が不足していたわけだと私は思っている」

などと言う。

「それはだめですよ。むずかしいことですよ。運命もあります

し、六条院様が求婚者になって現われておいでになつては、どの競争者だつて勝ち味はないと思いますけれど、あなただけはたいへんな御自信があつたのですね。近ごろになりましたこそ御官服の色が濃くおなりになつたようでございますがね」

こんなふうにかくし立てる小侍従の攻撃にはかなわないことを衛門督は思った。

「もう昔のことは言わないよ。ただね、このごろのようなまたとない好機会にせめてお居間の近くへまで行つて、私の苦しんでゐる心を少しだけお話しさせてくれることを計らつてくれないか。もつたいない欲念よくねんなどは見ていてごらん、もういっさい起こさな

いことにあきらめているのだから、いいだろう」

「それ以上のもつたいない欲心がありますかしら。恐ろしい望みをお起こしになったものですね、私は出てまいらなければよかったです」

強硬に小侍従は拒む。

「ひどいことを言うものではないよ。たいそうらしく何を言うのだ。后といっても恋愛問題がかつてお起こしになった人もないわけではないよ。まして宮中のことではなしさ、ほかからは結構なお身の上に見られておいでになっても、口惜くちおしいこともあれでは多かろうじゃないか。法皇様からはどのお子様よりも大事がられ



て御成人なすつて、今は同じだけの御身分でない方と同等の一人の夫人で、しかも最愛の方としてはお扱われにならないというくわしいことを私は知っているのだよ。人は無常の世界にいるのだから、君が宮の御幸福をこうして守ろうとしていることが皆むだなことになるかもしれないからね。私に冷酷なことを言っておかないほうがいいよ」

「人ほど大事がられない奥様だとお言いになって、それをあなたの力でよくしていただけるといいますか。六条院様と宮様は普通の夫婦というのでもありませんよ。保護者もなく一人でおいになりますよりはおぼしめという思召しで親代わりにお頼みになったので

すもの。院がお引き受けになりましたのもその気持ちでなすったことですよ、つまらないことを言つて、結局は宮様を悪くあなたはおっしゃるのですね」

ついには腹をたててしまった小侍従の機嫌きげんを衛門督えもんのかみはとつていた。

「ほんとうのことを言えば、あのまれな美貌びぼうの六条院様を良人おっとにお持ちになる宮様に、お目にかかつて自身が好意を持たれようとは考えても何もいないのだよ。ただ一言を物越しに私がお話するだけのことで、宮様の尊厳をそこねることはないじゃないか。神や仏にでも思っていることを言つて咎とがや罰を受けはしないじゃ

ないか」

こう言って衛門督は絶対に不浄なことは行なわないという誓いまでも立てて、ひそかに御訪問をするだけの手引きを頼むのを、初めのうちは強硬にあるまじいことであると小侍従は突きはねていたが、もともとあさはかな若い女房であるから、こうまでも思い込むものかと、熱心な頼みに動かされて、

「もしそんなことによいような隙すきが見つかりましたら御案内いたしましょう。院がおいでにならぬ晩はお几帳きちょうのまわりに女房がたくさんいます。お帳台には必ずだれかが一人お付きしているので、すから、どんな時にそうしたよいおりがあるものでしょうかね」

と困ったように言いながら小侍従は帰って行った。

どうだろう、どうだろうと毎日のように衛門督から責めて来られる小侍従は困りながらしまいにある隙すきのある日を見つけて衛門督へ知らせてやった。督は喜びながら目だたぬふうを作って小侍従を訪ねて行った。たず衛門督自身もこの行動の正しくないことは知っているのであるが、物越しの御様子に触れては物思いがいつそうつのるはずの明日までは考えずに、ただほのかに宮のお召し物の棲先つまさきの重なりを見るにすぎなかったかつての春の夕べばかりを幻に見る心を慰めるためには、接近して行って自身の胸中をお伝えして、それから一行の文ふみのお返事を得ることにもなればと

いうほどの考えで、宮が憐あわれんでくださるかもしれぬというはかない希望をいだいている衛門督でしかなかった。これは四月十幾日のことである。明日は賀かも茂の齋院の御禊みそぎのある日で、御姉妹きょうだいの齋院のために儀装車に乗せてお出しになる十二人の女房があつて、その選にあたった若い女房とか、童女とかが、縫い物をしたり、化粧をしたりしている一方では、自身らどうして明日の見物に出ようとする者もあつて、仕度したくに大騒ぎをしていて、宮のお居間のほうにいる女房の少ない時で、おそばにいるはずの按察使あぜちの君も時々通つて来る源中将が無理に部屋のほうへ呼び寄せたので、この小侍徒だけがお付きしているのであつた。よいおりであると

思つて、静かに小侍従はお帳台の中の東の端へ衛門督の席を作つてやった。これは乱暴な計らいである。宮は何心もなく寝ておいでになったのであるが、男が近づいて来た気配けはいをお感じになつて、院がおいでになったのかとお思ひになると、その男はかしこまった様子を見せて、帳台の床の上から宮を下へ抱きおろそうとしたから、夢の中でもものに襲われているのかとお思ひになつて、しいてその者を見ようとあそばすと、それは男であるが院とは違つた男であつた。これまで聞いたこともおありにならぬような話を、その男はくどくどと語つた。宮は気味悪くお思ひになつて、女房をお呼びになつたが、お居間にはだれもいなかったから

お声を聞きつけて寄って来る者もない。宮はお慄い出しふるになつて、水のような冷たい汗もお身体からだに流しておいでになる。失心したようなこの姿が非常に御可憐かれんであつた。

「私はつまらぬ者ですが、それほどお憎まれするのが至当だとは思われません。昔からもつたいたない恋を私はいだいておりましたが、結局そのままにしておけば闇やみの中で始末もできたのですが、あなた様をお望み申すことを発言いたしましたために、院のお耳にはいいり、その際はもつてのほかのこととも院は仰せられませんでした。それも私の地位の低さにあなた様を他へお渡しする結果になりました時、私の心に受けました打撃はどんなに大きかった

でしょう。もうただ今になってはかいのないことを知っておりまして、こうした行動に出ますことは慎んでいたのですが、どれほどこの失恋の悲しみは私の心に深く食い入っていたのか、年月がたてばたつほど口惜くちおしく恨めしい思いがつのっていくばかりで、恐ろしいことも考えるようになりました。またあなた様を思う心もそれとともに深くなるばかりでございました。私はもう感情を抑制することができなくなりまして、こんな恥ずかしい姿であるまじい所へもまいりましたが、一方では非常に思いやりのないことを自責しているのですから、これ以上の無礼はいたしません」

こんな言葉をお聞きになることによって、宮は衛門督えもんのかみであるこ



とをお悟りになった。非常に不愉快にお感じにもなったし、怖ろおそしくもまた思召おぼしめされもして少しのお返辞もあそばさない。

「あなた様がこうした冷ややかなお扱いをなさいますのはごもつともですが、しかしこんなことは世間に例のないことではないのでございますよ。あまりに御同情の欠けたふうをお見せになれば、私は情けなさに取り乱してどんなことをするかもしれません。かわいそうだとだけ言ってください。そのお言葉を聞いて私は立ち去ります」

とも、手を変え品を変え宮のお心を動かそうとして説く衛門督であつた。想像しただけでは非常な尊厳さが御身を包んでいて、

目前で恋の言葉などは申し上げられないもののように思われ、熱情の一端だけをお知らせし、その他の無礼を犯すことなどは思いも寄らぬことにしていた督であつたにかかわらず、それほど高貴な女性とも思われたい、たぐいもない柔らかさと可憐な美しさ<sup>かれん</sup>がすべてであるような方を目に見てからは、衛門督の欲望はおさえられぬものになり、どこへでも宮を盗み出して行つて夫婦になり、自分もそれとともに世間を捨てよう、世間から捨てられてもよいと思うようになった。

少し眠つたかと思うと衛門督は夢に自分の愛している猫<sup>ねこ</sup>の鳴いている声を聞いた。それは宮へお返ししようと思つてつれて来て

いたのであったことを思い出して、よけいなことをしたものだと思つた時に目がさめた。この時にはじめて衛門督は自身の行為を悟つたのである。が宮はあさましい過失をして罪に墮ちたこと  
悲しみにおぼれておいでになるのを見て、

「こうなりましたことによりまして、前生の縁がどんなに深かつたかを悟ってくださいませ。私の犯した罪ですが、私自身も知らぬ力がさせたのです」

不意に猫が端を引き上げた御簾みすの中に宮のおいでになった春の夕べのことえもんのかみも衛門督は言い出した。そんなことがこの悲しい罪に墮ちる因をなしたのかと思召おぼしめすと、宮は御自身の運命を悲しくば

かり思召されるのであった。もう六条院にはお目にかかれな  
いことをしてしまった自分であるとお思いになることは、非  
常に悲しく心細くて、子供らしくお泣きになるのを、もっ  
たいなくも憐れあわにも思つて、自分の悲しみと同時に恋人の悲  
しむのを見るのは堪えがたい気のする督であつた。夜が明  
けていきそうなのであるが、歸つて行けそうにも男は思  
われない。

「どうすればよいのでしょうか。私を非常にお憎みにな  
つていますから、もうこれきり逢あつてくださらないことも  
想像されますが、ただ一言を聞かせてくだ  
さいませんか」

宮はいろいろとこの男からお言われになるのもうるさく、苦し

くて、ものなどは言おうとしてもお口へ出ない。

「何だか気味が悪くさえなりましたよ。こんな間柄というものがあるでしょうか」

男は恨めしいふうである。

「私のお願いすることはだめなのでしょう。私は自殺してもいい気にもとからなっているのですが、やはりあなたに心が残って生きていましたものの、もうこれで今夜限りで死ぬ命になったかと思えますと、多少の悲しみはございますよ。少しでも私を愛してくださいさるお心ができましたら、これに命を代えるのだと満足して死ねます」

と言つて、衛門督は宮をお抱きして帳台を出た。隅すみの室まの屏風びょうぶを引きひろ拵かげ蔭かげを作つておいて、妻戸をあけると、渡殿わたどのの南の戸がまだ昨夜ゆうべはいつた時のままにあいてあるのを見つけ、渡殿の一室へ宮をおおろしした。まだ外は夜明け前のうす闇やみであつたが、ほのかにお顔を見ようとする心で、静かに格子をあげた。

「あまりにあなたが冷淡でいらつしやるために、私の常識というもののはすっかりなくされてしまいました。少し落ち着かせてやろうと思召すのでしたら、かわいそうだとだけのお言葉をかけてください」

衛門督が威嚇いかくするように言うのを、宮は無礼だと思ひになつ

て、何かとがめる言葉を口から出したく思召したが、ただ慄えら  
れるばかりで、どこまでも少女らしいお姿と見えた。ずんずん明  
るくなっていく。あわただしい気になっていながら、男は、

「理由のありそうな夢の話も申し上げたかったですけれど、あ  
くまで私をお憎みになりますのもお恨めしくてよしますが、どん  
なに深い因縁のある二人であるかをお悟りになることもあなたに  
あるでしょう」

と言って出て行こうとする男の気持ちに、この初夏の朝も秋の  
もの悲しさに過ぎたものが覚えられた。

おきて行く空も知られぬ明けぐれにいつくの露のかかる袖な  
り

宮のお袖を引いて督かみのこう言った時、宮のお心はいよいよ帰つ  
て行きそうな様子に楽になつて、

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむ  
べく

とはかなそうにお言いになる声も、若々しく美しいのを聞きさ



したままのようにして、出て行く男は魂だけ離れてあとに残るもののような気がした。

夫人の宮の所へは行かずに、父の太政大臣家へそつと衛門督えもんのかみは来たのであった。夢と言ってよいほどのはかない逢う瀬が、なおありうることは思えないとともに、夢の中に見た猫の姿も恋しく思い出された。大きな過失を自分はしてしまったものである。生きていることがまぶしく思われる自分になったと恐ろしく、恥ずかしく思つて、督はずつとそのまま家に引きこもっていた。

恋人の宮のためにも済まないことであるし、自身としてもやましい罪人になってしまったことは取り返しのかめことであると

思うと、自由に外へ出て行ってよい自分とは思われなかったの  
ある。陛下の寵姫ちようきを盗みたてまつるようなことをしても、これほ  
どの熱情で愛している相手であつたなら、処罰を快く受けるだけ  
で、このやましさはないはずである。そうした咎とがは受けないであ  
ろうが、六条院が憎悪ぞうおの目で自分を御覧になることを想像するこ  
とは非常な恐ろしい、恥ずかしいことであると衛門督は思ってい  
た。

貴女きじよと言っても少し蓮葉はすつばな心が内にあつて、表面が才女らしく  
もあり、無邪気でもあるような見かけとは違つた人は誘惑にもか  
かりやすく、無理な恋の会合を相手としめし合わせてすることに

もなりやすいのであるが、女三にょさんの宮みやは深さもないお心ではあるが、臆病おくびょう一方な性質から、もう秘密を人に発見されてしまったようにも恐ろしがりもし、恥じもしておいでになって、明るいほうへいざって出ることにすらおできにならぬまでになっておいでになって、悲しい運命を負った自分であるともお悟りになったであろうと思われる。宮が御病気のようにあるという知らせをお受けになって、六条院は、はなはだしく悲しんでおいでになる夫人の病気のほかに、またそうした心痛すべきことが起こったかと驚いて見舞いにおいでになったが、宮は別にどこがお悪いというふうにも見えなかった。ただ非常に恥ずかしそうにして、そしてめ

いっておいでになった。院のお目を避けるようにばかりして、下を向いておいでになるのを、久しく訪ねなかつた自分を恨めしく思っているであろうと、院のお目にそれが憐れにも、いたいたしいようにも映って、紫夫人の容体などをお話しになり、

「もうだめになるのでしょうか。最後になって冷淡に思わせてやりたくないと考えるものですから付いていっているのですよ。少女時代から始終そばに置いて世話をした妻ですから、捨てておけない気もして、こんなに幾月もほかのことは放擲したふうで付ききりで看護もしていますが、またその時期が来ればあなたによく思ってもらえる私になるでしょう」

などと言いになるのを、宮は聞いておいでになって、あの罪は氣<sup>け</sup>ぶりにもご存じないことを、お氣の毒なことのようにも、済まないことのようにもお思いになって、人知れず泣きたい気持ちでおいでになった。

衛門督の恋はあのことがあつて以来、ますますつのるばかりで、はげしい煩悶<sup>はんもん</sup>を日夜していた。賀茂祭りの日などは見物に出る公達<sup>きんだち</sup>がおおぜいで来て誘い出そうとするのであつたが、病氣であるように見せて寢室を出ずに物思ひを続けていた。夫人の女<sup>にょ</sup>二の宮<sup>みや</sup>には敬意を払うふうに見せながらも、打ち解けた良人<sup>おとと</sup>らしい愛は見せないのである。督は夫人の宮のそばでつれづれな時間を

つぶしながらも心細く世の中を思っているのであった。童女が  
持っている葵あおいを見て、

悔くやしくもつみをかしける葵草神あふひの許せる挿頭かざしならぬに

こんな歌が口ずさまれた。後悔とともに恋の炎はますます立ち  
ぼるようなわけである。町々から聞こえてくる見物車の音も遠い  
世界のことにように聞きながら、退屈に苦しんでもいるのであつ  
た。女二の宮も衛門督えもんのかみの態度の誠意のなさをお感じになつて、そ  
れは何がどうとはおわかりにならないのであるが、御自尊心が傷

つけられているようで、物思わしくばかり思召された。女房などは皆祭りの見物に出て人少々な昼に、寂しそうな表情をあそばして十三絃<sup>げん</sup>の琴を、なつかしい音に弾<sup>ひ</sup>いておいでになる宮は、さすがに高貴な方らしいお美しさと艶<sup>えん</sup>な趣は備わってお見えになるのであるが、ただもう少しの運が足りなかったのだと衛門督は自身のことを思っていた。

もろかづら落ち葉を何に拾ひけん名は睦<sup>むつ</sup>まじき挿頭<sup>かざし</sup>なれども

こんな歌をむだ書きにしていた。もったいないことである。

院はまれにお訪ねたずになつた宮の所からすぐに帰ることを氣の毒  
にお思いになり、泊まっておいでになつたが、病夫人を気づかわ  
しくばかり思つておいでになる所へ使いが来て、急に息が絶えた  
と知らせた。院はいつさいの世界が暗くなつたようなお気持ちで  
二条の院へ歸つてお行きになるのであつたが、車の速度さえもど  
かしく思つておいでになると、二条の院に近い大路はもう立ち騒  
ぐ人で満たされていた。邸内からは泣き声が多く聞こえて、大き  
な不祥事のあることは覆おおいがたく見えた。夢中で家へおはいりに  
なつたが、

「この二、三日は少しお快いようでしたのに、にわか



絶息をあそばしたのでございます」

こんな報告をした女房らが、自分たちも、いつしよに死なせてほしいと泣きむせぶ様子も悲しかった。もう祈<sup>きとう</sup>祷の壇は壊<sup>こぼ</sup>たれて、僧たちもきわめて親しい人たちだけが残ってもそのほかのは仕事じまいをして出て行くのに忙しいふうを見せている。こうしてもう最愛の妻の命は人力も法力も施しがたい終わりになったのかと、院はたえようもない悲しみをお覚えになった。

「しかしこれは物怪<sup>もののけ</sup>の所業だろうと思われる。あまりに取り乱して泣くものでない」

と院は泣く女房たちを制して、またまた幾つかの大願をお立て

になった。そしてすぐれた修験の僧をお集めになり、

「これが定<sup>き</sup>まった命数でも、しばらくその期をゆるめていただき  
たい、不動尊は人の終わりにしばらく命を返す約束を衆生にして  
くだすった。それに自分たちはおすがりする。それだけの命なり  
とも夫人にお授けください」

こう僧たちは言って、頭から黒煙を立てると言われるとおりの  
熱誠をこめて祈っていた。院も互いにただ一目だけ見合わす瞬間  
が与えられたい、最後の時に見合わせることでできなかった残念  
さ悲しさから長く救われたいと言ってお歎<sup>なげ</sup>きになる御様子を見て  
は、とうていこの夫人のあとにお生き残りになることはむずかし

かろうと思われて、そのことをまた人々の歎くことも想像するにかたくない。

この院の夫人への大きな愛が御仏<sup>みほとけ</sup>を動かしたのか、これまで少しも現われてこなかった物怪が、小さい子供に憑<sup>のりうつ</sup>って来て、大声を出し始めたのと同時に夫人の呼吸<sup>いき</sup>は通ってきた。院はうれしくも思召され、また不安でならぬようにも思召された。物怪は僧たちにおさえられながら言う、

「皆ここから遠慮をするがよい。院お一人のお耳へ申し上げたいことがある。私の霊を長く法力で苦しめておいでになったのが無情な恨めしいことですから、懲らしめを見せようと思いました

が、さすがに御自身の命も危険なことになるまで悲しまれるのを見ては、今こそ私は物怪であつても、昔の恋が残っているために出て来る私なのですから、あなたの悲しみは見過ごせないで姿を現わしました。私は姿など見せなくなつただけけれど」

と物怪は叫んだ。髪を顔に振りかけて泣く様子は、昔一度御覧になつた覚えのある物怪であつた。その当時と同じ無気味さがお心に湧<sup>わ</sup>いてくるのも恐ろしい前兆のようにお思われになつて、その子供の手を院はお捉<sup>とら</sup>えになつて、前へおすわらせになり、あさましい姿はできるだけ人に見させまいとお努めになつた。

「ほんとうにその人なのか。悪い狐<sup>きつね</sup>などが故人を傷つけるために

でたらめを言ってくることがあるから、確かなことを言うがいい。他人の知らぬことで私にだけ合点のゆくことを何か言ってみるがいい。そうすれば少しは信じてもいい」

院がこうお言いになると、物怪はほろほろと涙を流しながら、悲しそうに泣いた。

「わが身こそあらぬさまなれそれながら空おぼれする君は君なり

恨めしい、恨めしい」

と泣き叫びながらもさすがに羞恥しゅうちを見せるふうが昔の物怪に違  
う所もなかった。嘘うそでないことからかえってうとましい気がよけ  
いにして情けなくお思われになるので、ものを多く言わすまいと  
院はされた。

「中宮なかつぐみに尽くしてくださいますことはうれしい、ありがたいこと  
とはあの世からも見ておりますが、あの世界の人になっては子の  
愛というものを以前ほど深くは感じないのですか、恨めしいとお  
思いしたあなたへの執着だけがこんなふうにもなって残っていま  
す。その恨みの中でも、生きていますところにほかの人よりも軽く  
お扱いになったことよりも、夫婦のお話の中で私を悪くお言いに

なつたことが私をくやしくさせました。もう私は死んでいるので  
すから、私が悪くつてもあなたはよくとりなして言うてくださいっ  
ていいではありませんか。そうお恨みしただけで、こんな身に  
なっていますと大形おおぎような表示にもなつたのです。奥様を深く恨んで  
いませんが、法の護まもりが強くて近づけないので反抗してみただけ  
です。あなたのお声もほのかに承ることができましたからもうい  
いのです。私の罪の軽くなるような方法を講じてください。修  
法、読経どきようの声は私にとって苦しい焰ほのおになつてまつわってくるだけ  
です。尊い仏の慈悲の声に接したいのですが、それを聞くことの  
できないのは悲しゅうございます。中宮にもこのことをお話しく

ださいませ。後宮の生活をするうちに人を嫉妬しつとするような心を起こしてはならない、齋宮をお勤めになった間の罪を御仏みほとけに許していただけるだけの善根を必ずなさい、あの世で苦しむことをよく考えなければならぬとね」

などと言うが、物怪に向かってお話しになることもきまり悪くお思ひになって、物怪がまた出ぬように法の力で封じこめておいて、病夫人を他の室へお移しになった。

紫夫人が死んだという噂うわさがもう世間に伝わって弔詞くやみを述べに来る人たちのあるのを不吉なことに院はお思ひになった。今日の祭りの歸りの行列を見物に出ていた高官たちが、帰宅する途中でそ



の噂を聞いて、

「たいへんなことだ。生きがいのあった幸福な女性が光を隠される日だから小雨も降り出したのだ」

などと解釈を下す人もあった。また、

「あまりに何もかもそろった人というものは短命なものなのだ。

『何をさくらに』（待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひまさまし）という歌のように、そうした人が長生きしておれば、一方で不幸に甘んじていなければならぬ人も多くできるわけだ。二品の宮が院の御寵愛を一身にお集めになる日ちようあいもこれであるだろう。あまりにお気の毒なふうだったからね」

などとも言う人があつた。衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は引きこもっていた昨日の退屈さに懲りて今日は弟の左大弁、参議などの車の奥に乗って見物に出ていた町で、人の言い合っている噂が耳にはいった時に、この人は一種変わった胸騒ぎがした。「散ればこそいとど桜はめでたけれ」(何か浮き世に久しかるべき)などとも口ずさみながら同車の人々とともに二条の院へ参った。まだ確かでないことであるから、形式を病氣見舞いにして行つたのであるが、女房の泣き騒いでいる時であつたから、真実であつたかとさらに驚かれた。ちようと式部卿の宮がお駈<sup>か</sup>けつけになつた時で、萎<sup>しお</sup>れたふうで宮は内へおはいりになつた。押し寄せて来た多数の見舞い客の挨拶<sup>あいさつ</sup>

はまだことごとくは取り次ぎきれずに、家従たちの忙しがつてい  
る所へ左大將が涙をふきながら出て来た。

「どんなふうでいらっしゃるのですか。不吉なことを言う人があ  
るのを私たちは信じることができないで伺ったのです。ただ長い  
御疾患を御心配申し上げて参ったのです」

などと衛門督は言った。

「重態のまままで長く病んでおられたのですが、今朝の夜明けに絶  
息されたのは、それは物怪もののけのせいだったのです。ようやく呼い吸きが  
通うようになったと言って皆一安心しましたが、まだ頼もしくは  
思われないのですからね。気の毒でね」

と言う大将には実際今まで泣き続けていたという様子が残っていた。目も少しは腫<sup>は</sup>れていた。衛門督は自身のだいそれた心から、大将が親しむこともなかった継母のことでこうまで悲しむのは不思議なことであると目をつけた。こんなふうには高官らも見舞いに集まって来たことをお聞きになって、院からの御挨拶が伝えられた。

「重い病人に急変が来たように見えましたために女房らが泣き騒ぎをいたしましたので、私自身もつい心の平静をなくしているおりからですから、またほかの日に改めて御好意に対するお礼を申し上げます」

院のお言葉というだけで、もう衛門督えもんのかみの胸は騒ぎ立っていたのである。こうした混雑紛れでなくては自分の来られない場所であることを知っているのであるから腹ぎたないふるまいである。

蘇生そせいしたのちをまだ恐ろしいことに院は思いになって、夫人のためにもろもろの法力の加護をお求めになった。生霊いきりょうで現われた時さえも恐ろしかった物怪が、今度は死霊になっているのであるから、宗教画に描かれてある恐ろしい形相も想像されて、気味悪く、情けなく思召された院は、中宮のお世話をされることもこの時だけは気の進まぬことに思召されたが、しかしその人には限らず女というものは皆同じように、人間の深い罪の原因もとを作るも

のであるから、人生のすべてがいやなものに思われるとお考えになり、あれは他人がだれも聞かぬ夫婦の間の話の中にただ少し言ったことに過ぎなかったのにと、そんなことを思い出しになると、いよいよ愛欲世界がうるさくお考えられるのであった。ぜひ尼になりたいと夫人が望むので、頭の頂の髪を少し取って、五戒だけをお受けさせになった。戒師が完全に仏の戒めを守る誓いを、仏前で尊い言葉で述べる時に、院は体面もお忘れになり、夫人に寄り添って涙を拭ぬぐいつつ夫人とともに仏を念じておいでになったのを見ると、聡明そうめいな貴人も御愛妻の病に仏へおすがりになる心は凡人に変わらないことがわかった。どんな方法を講じ

て夫人の病を救い、長く生命を保たせようかと夜昼お歎なげきになるために、院のお顔にも少し痩やせが見えるようになった。五月などはまして氣候が悪くて病夫人の容体がさわいできとも見えなかったが、以前よりは少しいようであった。しかもまだ苦しい日々が時々夫人にあった。院は物怪の罪を救うために、日ごとに法華經ほけきょう一卷ずつを供養させておいでになった。そのほか何かと宗教的な営みを多くあそばされた。病床のかたわらで不断の読經どきょうもさせておいでになるのであって、声のいい僧を選んでそれにはあてておありになった。一度現われて以来おりおり出て物怪は悲しそうなことを言うのであって、全然退のいては行かないのである。

暑い夏の日になっていよいよ病夫人の衰弱ははげしくなるばかりであるのを院は歎き続けておいでになった。病に弱つていながらも院のこの御様子を夫人は心苦しく思い、自分の死ぬことは何でもないがこんなにお悲しみになるのを知りながら死んでしまうのは思いやりのないことであろうから、その点で自分はまだ生きるように努めねばならぬと、こんな気が起こったころから、米湯おもゆなども少しずつは取ることになったせい、六月になってからは時々頭を上げて見ることもできるようになった。珍しくうれしくお思いになりながら、なお院は御不安で六条院へかりそめに行つて御覧になることもなかった。



姫宮はあの事件があつてから煩悶はんもんを続けておいでになるうちに、お身体からだが常態でなくなつて行つた。御病氣のようにお見えになるが、それほどたいしたことではないのである。六月になつてからはお食欲しょくよくが減退してお顔色も悪くおやつれが見えるようになった。衛門督は思いあまる時々夢のように忍んで来た。宮のお心には今も愛情が生じているのではおありにならないのである。罪をお恐れになるばかりでなく、風采ふうさいも地位もそれはこれに匹敵する価値のない人であることはむろんであつたし、氣どつて風流男がる表面を見て、一般人からは好ましい美男という評判は受けていても、少女時代から光源氏を良人おととに与えられておいでに

なつた宮が、比較して御覧になつては、それほど価値に思われる顔でもないのであるから、無礼者であるという御意識以外の何ももない相手のために、妊娠をあそばされたというのはお気の毒な宿命である。気のついた乳母<sup>めのと</sup>たちは、

「たまにしかおいでにならないで、そしてまたこんなふう<sup>な</sup>に重荷を宮様へお負わせになる」

と院をお恨みしていた。寝<sup>やす</sup>んでおいでになることをお知りになつて、院は訪<sup>たず</sup>ねようとあそばされた。

夫人は暑い時分を清くしていいたいと思い、髪を洗つてやや爽快<sup>そうかい</sup>なふうになっていた。そしてそのまままた横になっていたのであ

るから、早くかわかず、まだぬれている髪は少しのもつれもなく清らかにゆらゆらと、病む麗人に添っていた。青みを帯びた白い顔は美しくてすきとおるような皮膚つきである。虫のもぬけのようにたよりない。しかも長く捨てて置かれた二条の院は女王にょおうの美の輝きで狭げにさえ見えた。昨日今日になって人ごこちが夫人に帰ってきたことによって院内が活気づいてにわかに流れも木草も繕われだした。そうした庭をながめても、それが夏の終わりの景けし色であるのに病臥びようがしていた間の月日の長さが思われた。池は涼しそうで蓮はすの花が多く咲き、蓮葉は青々として露がきらきら玉のように光っているのを、院が、

「あれを御覧なさい。自分だけが爽快がっている露のようじゃありませんか」

とお言いになるので、夫人は起き上がって、さらに庭を見た。こんな姿を見ることが珍しくて、

「こうしてあなたを見ることのできるのは夢のようだ。悲しくて私自身さえも今死ぬかと思われた時が何度となくあったのだから」

と、院が目には涙を浮かべてお言いになるのを聞くと、夫人も身にしむように思われて、

消え留まるほどやは経<sup>ふ</sup>べきたまさかに蓮<sup>はちす</sup>の露のかかるばかり  
を

と言った。

契りおかんこの世ならでも蓮の葉に玉ある露の心隔つな

これは院のお歌である。六条院へはお氣が進まないのである  
が、宮中の聞こえと法皇への御同情から、宮の床についておられ  
る知らせを受けていながら、いっしよに住むほうの妻の大病の氣

づかわしさから訪ねて行くこともあまりしなかったのであるから、女王の病のこんなふうにしよいい間にしばらくあちらの家へ行っ  
ていようという心におなりになつて院はお出かけになつた。

宮は心の鬼に院の前へ出ておいでになることが恥ずかしく晴れがましくて、ものをお言ひになる返辞もよくされないのを長い絶え間にこの子供らしい人もさすがに恨んでいるのであらうと院は心苦しくお思ひになり、慰めることにかかつておいでになつた。

お世話役の女房をお呼び出しになり、宮の御不快の経過などを院がお聞きになると、それは妊娠の徴候があつてのことであるとい  
う答えをした。

「今になって全く珍しいことが起こってきたね」

とだけ院はお言いになったが、お心の中では長くそばにいる人たちの中にもそうしたことはないのであるから、不祥なことがこちらで起こっているのではないかというような疑いをお覚えになりながら、それをくわしく聞こうとはされないで、ただ悪阻つわりに悩む人の若い可憐かれんな姿に愛を覚えておいでになった。やつと思いついておいでになったのであるから、すぐにお帰りになることもできず、二、三日おいでになる間にも、二条の院の女王の容体ばかりがお気づかわれになって、そのほうへ手紙ばかりを書き送っておいでになった。

「あんなにもしばらくの間にお言いになる感情がたまるのですかね。宮様をとうとうお気の毒な方様とお見上げする時が来ましたよ」

などと宮の御過失などは知らぬ人たちが言う。秘密に携わっている小侍従は院の御滞留の間を無事に過ごしうるかと胸をとどろかせていた。

衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は院が六条のほうへ来ておいでになることを聞くと、だいたいそれた嫉妬<sup>しつと</sup>を起こして、自己の恋のはげしさをさらに書き送る気になって手紙をよこした。院が暫時<sup>ざんじ</sup>対のほうへ行っておいでになる時で、だれも宮のお居間にいない様子を見て、小侍従はそれ



を宮にお見せした。

「いやなものを読めというのね。私はまた気分が悪くなってきた  
いるのに」

こう言つて、宮はそのまま横におなりになった。

「この端書はしがきがあまりに身にしむ文章なんでございますもの」

小侍従は衛門督の手紙を拈ひろげた。ほかの女房たちが近づいて来た気配けはいを聞いて、手でお几帳きちようを宮のおそばへ引き寄せて小侍従は去った。宮のお胸がいつそうとどろいている所へ院までも歸つておいでになったために、手紙をよくお隠しになる間がなくて、敷き物の下へはさんでお置きになった。二条の院へ今夜になれば行

こうと院は思いになり、そのことを宮へお言いになるのであった。

「あなたはたいしたことがないようですから、あちらはまだあまりにたよりないようなの見捨てておくように思われても、今さらかわいそうですから、また見に行つてやろうと思います。中傷する者があつても、あなたは私を信じておいでなさいよ。また忠実な良人<sup>おっと</sup>になる日が必ずありますよ」

これまではこんな時にも、子供めいた冗談<sup>じょうだん</sup>などをお言いになつて、朗らかにしている方なのであつたが、非常にめいっておしまいになり、院のほうへ顔を向けようともしれないのを、内にいだ

く嫉妬しつとの影がさしているとばかり院はお思いになった。昼の座敷でしばらくお寝入りになったかと思うと、蝸ひぐらしの啼なく声でお目がさめてしまった。

「ではあまり暗くならぬうちに出かけよう」

と言いながら院がお召しかえをしておいでになると、

「『月待ちて』（夕暮れは道たどたどし月待ちて云々うんぬん）とも言いますのに」

若々しいふうで宮がこうお言いになるのが憎く思われるはずもない。せめて月が出るころまででもいてほしいとお思いになるのかと心苦しくて、院はそのまま仕度したくをおやめになった。

夕露に袖濡らせとやひぐらしの鳴くを聞きつつ起きて行くら  
ん

幼稚なお心の実感をそのままな歌もおかわいくて、院は膝ひざをお  
かがめになつて、

「苦しい私だ」

と歎息たんそくをあそばされた。

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

などと躊躇ちゅうちゅうをあそばしながら、無情だと思われることが心苦しくてなお一泊してお行きになることにあそばされた。さすがにお心は落ち着かずに、物思いの起こる御様子で晩饗ばんせんはお取りにならずに菓子だけを召し上がった。

まだ朝涼あさすずの間に帰ろうとして院は早くお起きになった。

「昨日の扇をどこかへ失ってしまって、代わりのこれは風がぬるくていけない」

とお言いになりながら、昨日のうたた寝に扇をお置きになった場所へ行つてごらんになったが、立ち止まって目をお配りになると、敷き物のある一所の端が少し縊よれたようになっていた下か

ら、薄緑の薄様うすようの紙に書いた手紙の巻いたのがのぞいていた。何心なく引き出して御覧になると、それは男の手で書かれたものであつた。紙の匂においなどの艶えんな感じのするもので、骨を折った巧妙な字で書かれてあつた。二重ねにこまごまと書いたのをよく御覧になると、それは紛れもない衛門督えもんのかみの手跡であつた。院のお座の所で鏡をあけてお見せしている女房は御自分の御用の手紙を見ておいでになるものと思っていたが、小侍従がそれを見た時、手紙が昨日の色であることに気がついた。胸がぶつぶつと鳴り出した。粥かゆなどを召し上がる院のほうを小侍従はもう見ることもできなかつた。まさかそうではあるまい、そんな運命いたづらの悪戯が不意に

行なわれてよいものか、宮はお隠しになったはずであると小侍従は努めて思おうとしている。宮は何もお知りにならずになお眠つておいでになるのである。こんな物を取り散らしておいて、それを自分でない他人が発見すればどうなることであろうとお思いになると、その人が軽蔑けいべつされて、これであるから始終自分はおぶながっていたのである。あさはかな性格はついに墮落を招くに至ったのであると院は解釈された。

お帰りになったので、女房たちがあらかた宮のお居間から去った時に、小侍従が来て、

「昨日の物はどうなさいました。今朝けさ院が読んでいらっしやいま

したお手紙の色がよく似ておりましたが」

と宮へ申し上げた。はっとお思いになって宮はただ涙だけが流れに流れる御様子である。おかawaiiそうではあるがふがない方であると小侍従は見ていた。

「どこへお置きになったのでございますか。あの時だれかが参ったものですから、秘密がありそうに思われますまいと、それほどのこととは何でもなかったのですが、よいことをしておりますと心がとがめまして、私は退<sup>の</sup>いて行つたのでございますが、院が座敷へお帰りになりましたまでにはちよつと時間があつたのでございますもの、お隠しあそばしたろうと安心をしておりますた」



「それはね、私が読んでいた時にはいつていらっしやったものだから、どこへしまうこともできずに下へはさんでおいたのをそのまま忘れたの」

こう伺った小侍従は、この場合の気持ちをどう表現すればよいかも知らなかった。そこへ行つて見たが手紙のあるはずもない。

「たいへんでございますね。あちらも非常に恐れておいでになりまして、毛筋ほども院のお耳にはいることがあったら申し訳がないと言つておいでになりましたのに、すぐもうこんなことができたではございませんか。全体御幼稚で、男性に対して何の警戒もあそばさなかつたものですから、長い年月をかけた恋とは申し

ながら、こうまで進んだ関係になろうとはあちらも考えておいでにならなかったことでございますよ。だれのためにもお気の毒なことをなさいましたね」

と無遠慮に小侍従は言う。お若い御主人を気安く思って礼儀なしになっているのであろう。宮はお返辞もあそばさないで泣き入っておいでになった。御気分がお悪いばかりのようではなく、少しも物を召し上がらないのを見て、

「こんなにもお苦しそうでいらっしやるのに、それを捨ててお置きになって、もうすっかり快よくなっておいでになる奥様の御介抱を一所懸命になさらないとはね」

と乳母<sup>めのと</sup>たちは恨めしがった。

院はお帰りになってから、まだ不審のお晴れにもならぬ今朝の手紙をよく調べて御覧になった。女房のうちであの中納言に似た字を書く女があるのではないかという疑いさえお持ちになったのであるが、言葉づかいは明らかに男性であって、他の者の書くはずのないことが内容になってもいた。昔からの恋がようやく遂げられたのではあるが、なお苦しい思いに悩み続けていることが、文学的に見ておもしろく書かれてあって、同情は惹<sup>ひ</sup>くが、こんな関係で書きかわす手紙には人目に触れた時の用意がかねてなければならぬはずで、露骨に<sup>いちもくりようぜん</sup>一目瞭然に秘密を人が悟るようなことは

すべきでないものと、院はお思いになり、りっぱな男ではあるが、こうした関係の女への手紙の書き方を知らない、落ち散ることも思つて、昔の日の自分はこれに類する場合も文章は簡単にし  
て書き紛らしたものであるが、そこまでの細心な注意はできない  
ものらしいと、衛門督<sup>えもんのかみ</sup>を輕蔑<sup>けいべつ</sup>あそばされるのであつた。それにし  
ても宮を今後どうお扱いすればよいであろうか、妊娠もそうした  
不純な恋の結果だったのである。情けないことである。人から言  
われたことでもなく、直接に証拠も見ながら、以前どおりにあの  
人を愛することは、自分のことながら不可能らしい。一時的の情  
人として初めから重くなどは思っていない相手さえ、ほかの愛人

を持っていることを知っては不愉快でならぬものであるが、これはそうした相手でもない自分の妻である。無礼な男である。お上<sup>かみ</sup>の後宮と恋の過失に陥る者は昔からあったが、それとこれとは問題が違う。宮仕えは男女とも一人の君主にお仕えするのであって、同輩と見る心から友情が恋となつて不始末を起こす結果も作られるのである。女御<sup>によご</sup>や更衣<sup>こうい</sup>といつてもよい人格の人ばかりがいるわけではないから、浮き名を流す者はあつても、破綻<sup>はたん</sup>を見せない間は宮仕えを辞しもせずしていて、批難すべきことも起こつたであろうが、自分の宮に対する態度は第一の妻としてのみ待遇してきたではないか、心ではより多く愛する人をもさしおいて、最

大級の愛撫あいぶを加えていた自分を裏切っておしまいになるようなことと、そんなことは同日に論ずべきでない、これは罪深いことではないかと反感のお起こりになる院でおありになった。侍している君主のほうでもただ一通りの後宮の女性と御覧になるだけで、御愛情に接することもないような不幸な人に、異性の持つ友情が恋愛にも進んでゆけば、あるまじいこととは知りながらも、苦しむ男に一言の慰めくらいは書き送ることになり、相互の間に恋愛が成長してしまう結果を見るような間柄で犯す罪には十分同情してよい点もあるが、自分のことながらも、あの男くらいに比べて思い劣りされるほどの無価値な者でないと思うがと、院は宮を飽

き足らずお思いになるのであつたが、またこの問題はほかへ知らせてはならぬと思うことで御煩悶はんもんもされた。父帝もこんなふうに自分の犯した罪を知っておいでになって知らず顔をお作りになつたのではなからうか、考えてみれば恐ろしい自分の過失であつたと、御自身の過去が念頭に浮かんできた時、恋愛問題で人を批難することは自分にできないのであると思召おぼしめされた。

素知らぬふりはしておいでになるが、物思わしいふうは他からもうかがわれて、夫人は危い命を取りとめた自分をお憐みあわれになる心から、こちらへはお帰りになつたものの、六条院の宮をお思いになると心苦しくてならぬ煩悶がお起こりになるのであると解

釈していた。

「私はもう恢復かいふくしてしまったのでございますのに、宮様のお加減のお悪い時にお歸りになってお気の毒でございます」

「そう。少し悪い御様子だけれど、たいしたことでないのだから安心して歸って来たのですよ。宮中からはたびたび御使みつかいがあつたそうだ。今日もお手紙をいただいたとかいうことです。法皇の特別なお頼みを受けておられるので、お上かみもそんなにまで御関心をお持ちになるのですね。私が冷淡であればあちらへもこちらへも御心配をかけて済まない」

院が歎息たんそくをされると、



「宮中への御遠慮よりも、宮様御自身が恨めしくお思いになるほうがあなたの御苦痛でしょう。宮様はそれほどでなくてもおそばの者が必ずいろいろなことを言うでしょうから、私の立場が苦しゅうございます」

などと女王<sup>にょおう</sup>は言う。

「私の愛しているあなたにとって、あちらのことは迷惑千万に違いないが、それをあなたは許して、つまらない者の感情をまで思いやってくれる寛大な愛に比べて、私のはただお上が悪くお思いにならないかという点だけで苦勞をしているのは、あさはかな愛の持ち主というべきですね」

微笑をしてお言い紛らわしになる。

「六条院へはあなたが快くなった時にいっしょに帰ればいいのですよ。宮の御訪問をするのもそれからあとのことです」

そうきめておいでになるように仰せられた。

「私は静かな独棲ひとりずみというものもしてみとうございますから、あちらへおいでになって、宮様のお心のお慰みになりますまでずっといらっしゃい」

夫人からこんな勧めを聞いておいでになるうちに日数がたつた。

院のおいでにならぬ間の長いことで今までは院をお恨みにも

なつた宮でおありになるが、今はその一部を自身の罪がしからしめているのであるということをお知りになって、しまいに法皇のお耳へもはいったならどう思召すことであろうと、生きておいでになることすらも恐ろしくばかりお思われになるのであつた。お逢<sup>あ</sup>いしたいとしきりに衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は言ってくるが、小侍従は面倒な事件になりそうなのを恐れて、こんなことがあつたと緑の手紙のこ<sup>と</sup>を書いてやった。衛門督は驚いて、いつの間にそうしたことができたのであろう、月日の重なるうちにはいろいろな秘密が外へ洩<sup>も</sup>れるかもしれぬと思うだけでも恐ろしくて、罪を見る目が空にできた気がしていたのに、ましてそれほど確かな証拠が院のお手

にはいったということは何たる不幸であろうと恥ずかしくもった  
いなくすまない気がして、朝涼も夕涼もまだ少ないこのごろなが  
らも身に冷たさのしみ渡るもののある気がして、たてようもな  
い悲しみを感じた。長い歳月としつきの間、まじめな御用の時も、遊びの  
催しにもお身近の者として離れず侍してきて、だれよりも多く愛  
顧を賜わった院の、なつかしいお優しさを思うと、無礼な者とし  
てお憎しみを受けることになっては、自分は御前で顔の向けよう  
もない。そうかといって、すっかりお出入りをせぬことになれば  
人が怪しむことであろうし、院をばさらに御不快にすることにな  
ろうと煩悶はんもんする衛門督は、健康もそこねてしまい、御所へ出仕も

しなかった。大罪の犯人とされるわけではないが、もう自分の一生はこれでだめであるという気のすることによって、このことを予想しないわけでもなかったではないかと、あやまった大道に踏み入った最初の自分が恨めしくてならなかった。だいたい御身分相<sup>みす</sup>当な奥深い感じなどの見いだせなかった最初の御簾<sup>すきま</sup>の隙間も、しかるべきことではない。大将も軽々しいと思ったことはあの時の表情にも見えたなどと、こんなことも今さら思い合わせたりした。しいてその人から離れたいと願う心から欠点を捜すのかもしれない。どんなに貴人といっても、おおうで、気持ちの柔らかい一方な人は世間のこともわからず、侍女というものに警戒をし

なければならぬこともお知りにならないで、取り返しのつかぬあやまちを御自身のためにも作り、人にも罪を犯させる結果になったと思い、衛門督の心は、宮のお気の毒なことを思いやって堪えがたい苦悶くもんをするのであった。

宮が可憐かれんな姿で悪阻つわりに悩んでおいでになるのが院のお目に浮かんで、心苦しく哀れにお思われになった。良人おっととしての愛は消えたように思っておいでも、恨めしいのと並行して恋しさもおさえがたくおなりになり、六条院へおいでになった。お顔を御覧になると胸苦しくばかりおなりになる院でおりになった。祈禱きとつを寺々へ命じてさせてもおいでになるのである。表面のお扱

いでは以前と何も変わっていない。かえって御優遇をあそばされるようにも見えるのであるが、夫婦としてお親しみになることはそれ以来断えてしまった。人目を紛らすために御同室にお寝やすみになりながら、院がお一人で煩悶はんもんをしておいになるのを御覧になる宮のお心は苦しかった。秘密を知ったともお言いにならぬ院でおありになったが、女宮は御自身で罪人らしく萎縮いしゆくしておいになるのも幼稚な御態度である。こんなふうの人であるから不祥事も起こったのであろう。貴女らしいとはいってもあまりに柔らかな性質は頼もしくないものであるとお考えになると、いろいろの人の上がお気がかりになった。女御にょごがあまりに柔軟な様子である

ことは、この宮における衛門督のような恋をする男があるとすれば、その目に触れた以上精神を取り乱して大過失を引き起こすに至るかもしれぬ、女性のこうした柔らかい一方である人は、輕侮してよいという心を異性に呼ぶのか、刹那せつな的に不良な行為をさせてしまうものであると、院はこんなこともお思いになった。右大臣夫人がそれという世話を受ける人もなくて、幼年時代から苦勞をしながら才も見識もあつて、自分なども義父らしくはしながらも、恋人に擬しておさえがたい情念を内に包んでいたのを、かどただず気がつかぬふうに退け続けて、右大臣が輕佻けいちような女房の手引きでしいて結婚を遂げた時にも、自身は單なる受難者であること



を、それ以後の態度で明らかにして、親や身内の意志で成立した夫婦の形を作らせたことなどは、今思ってみてもきわめてりっぱなことであつたと、玉鬘たまかざりのこともこのふがない人に比べてお思われになった。深い宿縁があつて夫婦になった人であるから、離婚をしようとは考えないが、品行問題で世評の立つことになれば、それにしたがつて知らず知らず多少の侮蔑ぶべつを自分は加えることになるであらう。あまりにも実質に伴わない尊敬をしてきたと、以前からのことを思つてもごらんになった。

院は二条の朧月夜おぼろつきよの尚侍になお心を惹ひかれておいでになるのであつたが、女三によさんの宮みやの事件によつて、後ろ暗い行動はすべきでな

いという教訓を得たようにお思いになって、その人の弱さにさえ反感に似たようなものをお覚えになった。尚侍が以前から希望していたとおりに尼になったことをお聞きになった時には、さすがに残念な気がされてすぐに手紙をお書きになった。その場合に臨んで、されてよい予報のなかったことをお恨みになる言葉がつづられてあつた。

あまの世をよそに聞かめや須磨<sup>すま</sup>の浦に藻塩<sup>もしほ</sup>垂<sup>た</sup>れしもたれなら  
なくに

人世の無常さを味わい尽くしながらも、今日まで出家を実行しえない私を、あなたはどんなに冷淡になっておいでになってもさすがに回向えこうの人数の中にはお入れくださるであろうと、頼みにされるところもあります。

などという長いお文ふみであつた。早くからの志であつたが、六条院がお引きとめになるために、それでない表面の理由は別として、尚侍は尼になるのを躊躇ちゆうちゆうするところがあつたのでさえあるから、このお手紙を見て青春時代から今日までの二人のつながりの深さも今さらに思われて身にしむ尚侍であつた。返事はもう今後書きかわすことのない終わりのものとして心をこめて書いた尚侍

の手跡が美しかった。

無常は私だけが体験から知ったものと思っておりましたが、し  
おくれたと仰せになりますことで、こんなにも思われます。

あま船にいかがは思ひおくれけん明石<sup>あかし</sup>の浦にいさりせし君

回向<sup>えこう</sup>には、この世のすぐれた方として決してあなた様を洩<sup>も</sup>らし  
はいたしません。

これが内容である。濃い鈍色<sup>にび</sup>の紙に書かれて、密<sup>しきみ</sup>の枝につけて  
あるのは、そうした人のだれもすることであつても、達筆で書か

れた字に今も十分のおもしろみがあった。この日は二条の院においでになったので、夫人にも、もう実際の恋愛などは遠く終わった相手のことであつたから、院はお見せになった。

「こんなふうに侮辱されたのが残念だ。どんな目にあつても平気なように思われて恥ずかしい。恋愛的な交際ではなしに、友人として同程度の趣味を解する人で、仲よくできる異性はこの人と齋院だけが私に残されていたのだが、今はもう尼になつてしまわれた。ことに齋院などは尼僧の勤めをする一方の人になつておしまいになった。多くの女性を見てきているが、高い見識をお持ちになつて、しかもなつかしい匂いにおの備わっているような点であの方

に及ぶ人はなかった。女を教育するのはむずかしいものですよ。夫婦になる宿命というものは、目に見えないもので、親の力でどうしようもないものだから、結婚するまでの女の子の教育に親は十分力を尽くすべきだと思う。私は娘を一人しか持たなくてその責任の少ないのがうれしい。まだ若くて人生のよくわからなかったところは、子の少ないことが寂しく思われもしたものですけどね。まあ孫の内親王をよくお育てしておあげなさい。女御にょごはまだ大人になりきれないで宮廷へはいつてしまったのだから、すべてがいまだに不完全なものだろうと思われる。姫宮の教育は最高の女性を作り上げる覚悟で、微瑕びかもない方にして、一生を御独身でお暮

らしになってもあぶなげのない素養をつけたいものです。結婚をすることになっている普通の家の娘はまた良人おっとさえりっぱであれば、それに助けられてゆくこともできますがね」

などと院がお言いになると、

「りっぱなお世話はできませんでも、生きています間は姫宮のおためになりたい心でございますが、健康がこんなのではね」

と答えて夫人は心細いふうにわが身を思い、自由に信仰生活へはいることのできた人々をうらやましく思った。

「尚侍の所は尼装束などもまだよくとのつていないことだろうから、早く私から贈りたいと思うが、袈裟けさなどというものはどん

なふうにしてこしらえるものだろう。あなたがだれかに命じて縫わせてください。一そろいは六条の東の人にしてもらいましょう。あまりに法服らしくなつては見た感じもいやだろうから、その点を考慮して作るのですね」

と院はお言いになった。青鈍色あおにびの一そろいを夫人は新尼君のため、手もとで作らせた。院は御所付きの工匠をお呼び寄せになつて、尼用の手道具の製作を命じたりしておいでになった。座蒲ざぶと団ん、上敷うわしき、屏風びょうぶ、几帳きちょうなどのこともすぐれた品々の用意をさせておいでになった。

紫夫人の大病のために法皇の賀宴も延びて秋ということになつ



ていたが、八月は左大将の忌月きづきで音楽のほうをこの人が受け持つのに不便だと思われたし、九月はまた院の太后のお崩れかくになった月で、それもだめ、十月にはと六条院は思っておいでになったが、女三によさんの宮みやの御健康がすぐれないためにまた延びた。衛門督えもんのかみの夫人になっておいでになる宮はその月に参入しんいりされた。舅の太政大臣が力を入れて豪奢ごうしゃな賀宴がささげられたのである。病気で引きこもっていた衛門督もその時はじめて外出をしたのであった。しかもそのあとはまた以前にかえって、病床に親しむ督であった。女三の宮も御煩悶はんもんばかりをあそばされるせい、月が重なるにつれてますますお身体からだがお苦しいふうに見えた。院は恨めしいお氣

持ちはあつても、可憐<sup>かれん</sup>な姿をして病んでおいでになる宮を御覽になつては、どうなるのであらうと不安を覚えてお歎<sup>なげ</sup>きになることが多かった。祈<sup>き</sup>禱<sup>と</sup>をおさせになることで御多忙でもあつた。法皇も宮の御妊娠のことをお聞きになつて、かわいく想像をあそばされ、逢<sup>あ</sup>いたく思召<sup>おぼしめ</sup>された。長く六条院は二条の院のほうに別れておいでになつて、お訪<sup>たず</sup>ねになることもまれまれであると申し上げた人も以前あつたことによつて、御妊娠がただ事の結果でなくはないのであるまいかとふとこんなことを思召すとお胸が鳴るのもあつた。人生のことが今さら皆お恨めしくて、紫夫人の病氣のころは院があちらにばかり行つておいでになつたのを、もつとも

なこととはいえ、思いやりのないこととして聞いておいでになったが、夫人の病後も院の御訪問はまれになったというのは、その間に不祥なことが起こったのではあるまいか。宮が自発的に墮落の傾向をおとりになったのではなく、軽薄な女房の仕業しわざなどで不快な事件があつたのではなかろうか、宮廷における男女の間は清潔な交際で終始しなければならぬものであるのに、その中にさえ醜聞を作る者があるのであるからと、こんなことまでも御想像あそばされるのは、いっさいをお捨てになった御心境にもなお御子をお思いになる愛情だけは影を残しているからである。法皇が愛のこもったお手紙を宮へお書きになったのを、六条院も来てお

いでのなる時で拝見されたのであった。

用事もないものですから無沙汰ぶさたをしているうちに月日がたつと  
いうこともこの世の悲しみです。あなたが普通でない身体からだに  
なつて健康もそこねているということを知りました  
が、今はどうですか。世の中が寂しくなるような運命に出あつ  
ても、忍んでお暮らしなさい。恨めしがかる様子をお見せになつ  
たり、妬ねたみを告げたりすることは上品なものではありません。  
などと訓さとしておありになるのである。院はお気の毒で、心苦し  
くて、宮に秘密のあることなどはお知りあそばされずに、自分の  
不誠意とばかり解釈しておいでのなるのであらうとお思ひになつ

て、

「お返事はどうお書きになりますか。心苦しいお手紙で私はつらい気がしますよ。あなたにどんなことがあっても、人に変わった様子は見せまいと私は努めているのですよ。だれがいろいろなことを申し上げたのだろう」

とお言いになると、恥じて顔をおそむけになる宮のお姿が可憐かれんであつた。顔がすっかり瘦やせて物思いに疲れておいでになるのが上品に美しい。

「あなたの幼稚な性質を知っておいでになって、こんなにもお言いいになるのだと、私は他のことと思ひ合わせてごもつともだと思

われる点がありますよ。それで今後も危な<sup>あぶ</sup>かしく思われてならない。こんなふうに言ってしまうおうとは思わなかったことですが、院が私を頼みがいなく思召すだろうと思うことが苦痛ですからね。あなただけにでも私が軽薄な者でないことを認めてほしいと思うのですよ。深く物をお考えにならないで、人のいいかげんな言葉にお動きになるあなたには、私のほんとうの愛が浅いものに見えもするでしょうし、またあなたとは年<sup>とし</sup>齡の差のはなはだしい良人<sup>おっと</sup>を軽蔑<sup>けいべつ</sup>したくもなるでしょうけれど、私としてそれを残念に思わないわけはありませんが、院の御在世中だけは、これを幸福な道としてお選びになったことですから、老いた良人をもあまり

無視するようなことはお慎みになるがいいのですよ。昔から願っている出家の志望も、自分よりは幼稚な宗教心しか持つまいと思っていた女の人たちが先に実行するのを傍観しているのも、私自身がこの世の欲を捨てえないのではなくて、出家をあそばす際にはあなたをお託しになった院のお志に感激した心が、すぐまた続いてあなたを捨てて行くような行動を取らせなかったのですよ。以前は気がかりに思われた人も今ではもう出家の絆ほだしにならないだけになっているのです。女御だつてどうなるか知りませんが、皇子たちがお殖ふえにもなつてゆくのですから、後宮の地位などは問題にさえせねば苦勞のない立場を得られることだけはでき

ると私も見ておけます。そのほかの人たちは成り行きのままで、私といっしょに出家をしてしまってももういいほどの年齢としになつているとこのごろでは思われます。院ももう長くはおいでにならないでしょう。以前よりいっそうお身体からだが弱くおなりになつて、心細い御様子でいらつしゃるのことですから、今になつて悪い名などをお耳に入れて御心配をかけてはいけませんよ。この世は何でもありませんが、来世のお妨げになることをしてはあなたの罪も大きくなりますよ」

そのことと露骨にお言いにならないのであるが、しみじみとお説きになるために、宮は涙ばかりがこぼれて、知らず知らずめい



り込んでおしまいになったのを御覧になる院も、お泣きになつて、

「他の人がこうしたことを言うのを、聞く必要もない老人としよりの理窟りくつだと思った私だが、いつのまにかそれを言うほうの人に私がなっている。よけいなことを言う老人だと思ひになつていつそいうやになるでしょう」

ともお言いになつて、硯すずりを引き寄せて御自身で墨をおすりになり、紙をお選よりになりなどして、お返事を書かせようとされるのであるが、宮は手も慄ふるえてお書きになれない。あの濃厚な言葉の盛られてあつた衛門督えもんのかみの手紙の返事はこんなに洩らずに書かれた

であろうとお思いになると、また反感が起こるのでもおありになつたが、それでも院は言葉などを口授くじゅしてお書かせになつた。

「お伺いになることはこんなことで今月もだめでしたね。それに新婚者の女にょ二の宮みやが派手はでな御賀をおささげになつた時に、老人の妻であるあなたが競争的に行き行くのは遠慮すべきだと思ひましたよ。十一月はあなたのお母様の忌月でしょう。十二月はあまりに押しつまってよろしくないし、あなたの身体からだも見苦しくなるだろうから、久しぶりにお姿を御覧に入れるのはいかがかと思ひますが、しかしそうそう延ばしてよいことではありませんからね、あまり物思いをしないようにして、朗らかな心になつて、瘦やせたお

顔のなおるようにまずなさい」

などとお言いになって、さすがにかわいくは思召すのであった。

衛門督をどんな催し事にも必要な人物としてお招きになって御相談相手に今まではあそばす院でおありになったが、今度の法皇の賀に限って何の仰せもない。人が不審がるであろうとは思っているのであるが、その人が来てはすかしめられた老人である自分の見られることも不快であるし、自分が彼を見ては平静で心がありえなくなるかもしれぬと院は思いになって、もう幾月も参殿しない人を、なぜかとお尋ねになることもないのである。ただ

の人たちは衛門督が病氣続きであつたし、六条院にもまた音楽その他のお催しの全くない年であるからと解釈していたが、左大將だけは何か理由のあることに違いない、多感多情な男であるから、自分が推測していたあの恋で自制の力を失うようなことがあつたのではないかとは見ていても、まだこれほど不祥なことが暴露してしまったとは想像しなかつた。

十二月になつた。十幾日と法皇の御賀の日が定められて六条院の中は用意に忙しくなつた。二条の院の夫人はまだそのまま歸らずにいたが、御賀の試楽があるのに興味を覚えてもどつてきた。女御も実家にいた。今度のお産でお生まれになつたのもまた男宮

であつた。次々に皆かわいい宮様を夫人はお世話することに生き  
がいを覚えていた。試楽の日は右大臣夫人も六条院へ来た。左大  
将は東北の御殿でそれ以前にすでに毎日監督する舞曲の練習をさ  
せていたから、花散里夫人は試楽の見物には出て来なかつた。衛<sup>えも</sup>  
門督<sup>んのかみ</sup>をこの試楽の日に除外するのは惜しく物足らぬことであると  
院は思いになつたし、それ以上にまた人の不審を引くことをお  
恐れにもなつて、来るようにと使いをお向けになつたが、病の重  
いことを申して督は出て来ようとしなかつた。病氣といつても何  
という名のある病をしているのでもないわけであるが、やましく  
思う点があるのであらうと、心苦しく思召して、特使をさえもお

やりになつて招こうとあそばされた。父の大臣も、

「なぜ御辞退をしたかね。何か含むことでもあるように院がお思  
いになるだろうに。大病というのではないのだから、無理をして  
も参つたほうがよい」

と勧めていたところへ再度のお使いが来たのであつたから、つ  
らい気持ちをいだきながら参つた。それはまだ他の高官などの集  
まつて来ない時分であつた。これまでのようにお座敷の御簾みすの中  
へ衛門督をお入れになつて、院御自身はまた一つの御簾を隔てた  
奥のお居間においでになつた。噂うわさのとおり非常に痩せて顔色が  
悪かつた。平生もはなやかな派手はでな美しさは弟たちのほうに多く

て、この人は深く落ち着いた静かな風采ふうさいによさのあった人であるが、今日はことにおとなしい身のとりなしで侍している姿を、内親王の配偶者として見ても相応らしい男であるが、その関係の正しくないのが不快だ、憎悪ぞうおを覚えずにはおられないのであると院は思召したが、さりげなくしておいでになった。

「機会がなくてあなたにも長く逢あいませんでしたね。長く病人の介抱をしていて何の余裕もなくてね、前からここへ来ておいでになる宮が、院の賀に法事をして差し上げたいと言っておられたのが、いろいろな故障で滞とどまっていますね、今年も暮れになったので、これ以上延ばすこともできず、以前に計画したとおりのことはと

とのわないが、形だけでも精進のお祝い膳ぜんを差し上げる運びになつて、賀宴などというたいそうだが、親戚しんせきの子供たちの数がたくさんにもなっているのだから、それだけでも御覧に入れようと思つて舞の稽古けいこなどをさせ始めたものだから、せめてそれだけでもうまくゆくようにと思つて、拍子が合うか試してみるのです  
が、指導をしていたくのに、だれがよいかともよく考える間がなく、あなたに御面倒を見てもらうのがよいときめて、長くおいでもなかつたお恨みも捨てたわけですよ」

とお言いになる院の御様子に、昔と変わった所もないのであるが、衛門督は羞恥しゆううちを感じて自身ながらも顔色が変わっている気が



して、急にお返辞ができないのであった。

「長らく奥様がたが御病氣をしておいでになりますことを承っておりまして、御心配を申し上げながら、前からございました脚かっけ氣がしきりに出てまいりまして、歩行が困難でございましたために御所へ上がることができませんで、すっかり世の中から隔離されましたような寂しい生活をいたしておりました。院がおめでたい年に達せられますので、年来の御交誼こうぎに対してまずお祝いを申し上げなければと父が申ししておりましたが、関白を拝辞しました自分が表だって出ることよりも、地位は低くとも中納言の私が主催するのが妥当であると父は考えるようになりました、私の誠意を

お目にかくべきだと勧められましたものですから、病体をおしてあちらへはお伺いいたしたのでございます。いよいよお寂しい静かな御生活のように拝見いたしましたあちらの御様子では、はなやかな賀宴をお持ち込みあそばすようなことは恐縮なされるだけではないかと拝察されまして、こちら様の御質素な御計画はかえって御満足になることかと存ぜられます」

と衛門督<sup>えもんのかみ</sup>が申すと、華奢<sup>かしや</sup>を尽くしてお目にかけたという前日の賀宴を女二の宮の関係でしたとは言わずに、父のためにしたと話すのに心の鍛錬のできていることがうかがわれると院は思召された。

「私の所でやらせていただくことはこのとおりに簡単なことであるのを見て、一概に悪く言う人もあるであろうと思っていたが、理解のあるお言葉を聞いて、さすがにとあなたにはいよいよ敬意が払われる。大將は役人としては少しは経験ができたようでも、そうした繊細な観察をすることなどは、得意でもないだろうが、いっこうだめですよ。法皇はあらゆる芸術に通じておいでになるが、その中でも最も音楽の御造詣ぞうけいが深いから、それらに遠ざかっておいでになる御出家後といえども院が御覧になるのだと思うと晴れがましいのですよ。あの大將といっしょに、舞い手になる子供へ、心得べきことをよく注意しておいてくれたまえ。専門家の

師匠というものは自身の芸には偉くても融通のきかないものだから」

などとお命じになるなつかしい味のある院の御様子をうれしく拝しながらもまた衛門督は恥ずかしく、きまり悪く思われて、言葉少なにしていって少しも早く御前を立って行きたいと願われる心から、以前のように細かい話しぶりは見せずにいるうち、ようやく願いどおりにここを去るによい時を見つけた。東北の御殿で大将が掛<sup>か</sup>りになって十分に用意してあった舞い手と楽人の衣装などが、また衛門督の意見によって加えられるものもできた、その道には深く通じている衛門督であつたから。今日は試楽の日なので

あるが、これだけを見物するのにとどまる夫人たちも多いため、目美しくして見せるのに、賀の当日の舞い人の衣装は、明るい白しろつ椽るばみに紅紫の下襲したかさねを着るはずであつたが、今日は青い色を上えんじに臙脂えんじを重ねさせた。今日の楽人三十人は白襲しろがさねであつた。南東の釣殿つりどのへ続いた廊の室へやを奏樂室にして、山の南のほうから舞い人が前庭へ現われて来る間は「仙遊霞せんゆうか」という楽が奏されていた。ちらちらと雪が降って、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微笑ほほえむ枝が見える林泉の趣は感じのよいものであつた。

縁側に近い御簾みすの中に院のお席があつて、そこにはただ式部卿しきぶきやうの宮が御同席され、右大臣の陪覧する座があつただけである。以

下の高官たちは皆縁側に席をして、そこには形式を省いた饗応きやうおうの物が出されてあった。右大臣の四男と、左大将の三男、それに兵部卿つぶきやうの宮の御幼年の王子お二人の四人立ちで万歳樂が舞われるのであるが、皆小さい姿でかわいかった。四人とも皆高い貴族の子供たちで風貌ふうぼうが凡庸でない。皆にいたわれながら小公子たちは登場した。また大将の典侍腹てんじばらの二男と、式部卿の宮の御長男でもとは兵衛督であって今は源中納言となっている人の子のこの二人が「皇※」きうじやう、右大臣の三男が「陵王」りやうおう、大将の長男の「落蹲」らくそんのほかに「太平楽」「喜春楽」などの舞曲も若い公達きんだちが演じた。日が暮れてしまうと御前の御簾は巻き上げられて、音楽にも舞にも

おもしろみが加わってゆく。かわいい姿の御孫の公達は秘伝を惜しまずそれぞれの師匠が教えた芸に、よい遺伝からの才気の加味された舞をだれもおもしろく見せるのを、皆かわいく院はおぼしめ思召した。老いた高官たちは皆落涙をしていた。式部卿の宮も御孫の芸にお鼻の色も変わるほど感動されたのであった。六条院が、

「年のゆくにしたがって酔い泣きをするのがますます烈はげしくなつてゆく。衛門督えもんのかみのおかしそうに笑っておられるのが恥ずかしい。歳月はさかさまに進むものではないからね。あなたがたでも老いはのがれられないのですよ」

と言つてその人の顔を御覧になる。だれよりもまじめに堅く  
なつていて、偽りでなく身体からだの具合も悪く思われ、おもしろいこ  
とも目にとまらぬ気持ちになつてゐる衛門督を、お名ざしにな  
り、酔態に託してこう仰せられるのは戯れらしくはあつたが、そ  
の人ははつと胸がとどろいて、めぐつて来た杯は手に取つてもた  
だ少ししか飲まないのを、院は見とがめになつて、御座からたび  
たび侍者に酒を持たせておつかわしになり、おいしいになるのを、  
困りながら辞退する取りなしなども、平凡な人とは見えず感じよ  
く院は思いになつた。身心の苦痛に堪えられなくなつて衛門督  
はまだ宴の終わらぬうちに辞して歸つたが、悪酔いからさめるこ



とのできないのは、院を目のあたり見て罪の自責に苦しんだために逆上したのであろうが、それほど臆病おくびょうな自分ではなかったはずであるがと悲しんだ。一時的な酒精の毒ではなくてそのまま衛門督は寝ついて重い容体になった。衛門督の父母がよそに置いてあるのが不安になり、自邸へつれもどすことにしたのを、夫人の宮の悲しがつておいでになるのがまた衛門督には苦しく思われた。何事もなかった間は、衛門督自身も、宮をお愛する情熱のありなしすら忘れていくほどの良人であったが、もうこの世での別れかもしれぬと予感される今日の心には、宮をお残しして行くことが悲しくて、未亡人の寂しい人におさせするのが堪えられない苦

痛に思われ、またもったいなくも思われ歎なげかれるのであった。宮の御母の御息所みやすどころも非常に悲しんだ。

「世間の慣ならいでは親は親として、御夫婦というものはどんな時にもごいっしょにおいでになることになっています。あちらへ移っておしまいになって、御回復なさるまで別々においでになるのは、宮様のためにおかわいそうなことですから、せめてもうしばらくの間こちらで養生をなさいますせ」

この人が病床との隔てに几帳きちようだけを置いて看護をしているのである。

「ごもつともです。私ごとき者と結婚をしてくださいました宮様

のためには、せめて私が長生きをして相当な地位を得るように努力せねばならぬと心がけてはいたのですが、こんな病人になつてしまいましたは、私の愛がどれほどのものであつたかを宮様にわかつていただけないで終わるかと思ひますことで、もう命の助からぬような気のしますうちでも、死なれぬ気がするのです」

などと泣き合つていて、迎えようとするのに、すぐに移つて来ないのを母の夫人は気づかわしがって、

「そんな場合に、どうして親の所へ来ようとあなたは思つてくれないのだろう。私が病氣をする時には、おおぜいの子供の中でも特にあなたがそばにいてほしく、またいてくれれば頼もしくてう

れしいのだのに、いつまでもなぜそちらにあなたはいる」

こんなことを使いに言わせて来るのにももつともなところがあつて、衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は母へ同情をせずにはおられないのであつた。

「私がいちばん初めに生まれたためなのでしょうが、大事にされていまして、こんなになつてもまだ母はかわいがりまして、しばらくの間でも逢<sup>あ</sup>わずにいることを苦しがるのですから、もう頼み少ない病状になつている際に、母の逢いたがる心を満足させないのは未来の世までの罪になるだろうと思われまますから、とにかく病床をあちらへ移します。もういよいよ危篤になつたというしらせがありましたら、そつと大臣邸へおいでなさい。必ずもう一度

お目にかかりましょう。ぼんやりとした性質なものですから、気もつかずにあなたを不愉快におさせしたような場合もあったであろうと思われますのが残念でなりません。こんなに短命で終わろうとは思いませんで、長い将来に誠意をくんでいただけの日が必ずあるもののように思って安心していました」

と、衛門督は宮に申して、泣く泣く父の家へ移って行った。宮はあとに思いこがれておいでになった。大臣家では病人の扱いに大騒ぎをして、きとう祈祷やその他に全力を尽くすのであった。病は最悪という容態でもない。ただ食欲がひどく減退して、もうこちらへ来てからは果物くだものをさえ取ろうとしなかった。教養の足りた優秀

な高官と見られている人が、こんなふうに頼み少ない容体になつて、いることを世間は惜しんで、見舞いを申し入れに来ぬ人もない。宮中からも法皇の御所からもしばしばお見舞いの御使みつかいが来て、衛門督の病状を御心痛あそばされているのを見ても、両親は悲しくばかり思われた。六条院も非常に残念に思召おぼしめして、たびたび懇切なお見舞いの手紙を大臣へ下された。左大將はまして仲のよい友人であつたから、病床へもよく訪ねたずて来て、衛門督をいたましがつていた。

法皇の御賀は二十五日になつた。現在での花形の高官が重い病氣をしてその一家一族の人たちが愁うれいに沈んでいる時に決行され

るのは寂しいことのように院はお思いになったが、月々に支障があつて延びてきたことであつたし、ぜひ今年じゆうにせねばならぬことでもあつたから、やむをえぬことだったのである。院は姫宮の心情を哀れにお思いになっていた。かねての計画のように五十か寺での御誦経すきようが最初にあつて、法皇のおいであそばされる寺でも大日如来だいにちによらいの御祈りが行なわれた。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---